325
394

日曜學校叢書

第四編

舊約聖書總論

神學博士 ウオーター・ダブリユー・ムートア
神學博士 エドワード・マツク 共著

日本日曜學校協會發行

始

325-394

神學博士 ウオーター・ダブリユー・ムーア
神學博士 エドワード・マック 共著

舊約聖書總論

大正
11. 1. 24
内交

（日曜學校教師用）

舊約聖書總論序

昨秋東京に開かれた第八回世界日曜學校大會は宗教々育に對する一般の興味を喚起し、日曜學校事業の發展上に新紀元を劃したのである。而して日曜學校教師の養成は本事業の發展に伴ふ必然の急務である。然るに日曜學校の現狀を見ると一般教師が非常に不足して居る、どこの日曜學校でも教師不足のために思つた樣な活動が出來ない有樣である、又教師を養成するとしても良講師を得る事は容易でない、良講師が得られない場合に良教科書があれば幾分其の缺を補ふ事が出來るのである。斯かる必要上既に日本日曜學校協會は二三の著書を出版し、今回更に本書を譯出して同好の諸兄姉に捧げる事となつたのである。本書は米國國際日曜學校協會の公認せる新標準（ニュー、スタンダード、チーチャー、プレーニング、コース）日曜學校教師教科書全八冊の內の一部であつて米國に於ける新教各派の採用する所となつて居る良書である。本書は單に普通の舊約總論ではなくて、舊約聖

書の内どの部分が兒童の教材に適し又これを如何に日曜學校生徒に教ふ可きや等を親切に研究して居る書物である、故に舊約聖書總論と云ふよりは寧ろ舊約聖書教授法と云ふ方が適當かとも思はれるのである。原著名は The Teaching Value of the Old Testament で舊約聖書に精通し、同時に日曜學校に關係深きモーア博士とマック博士との共著である。本書は單に日曜學校に志す牧師、神學生、教師の好伴侶たるのみならず一般平信徒の聖書研究の指針として適當なる書である。本協會は引續き「基督傳と其教授法」「使徒時代と其教材的價値」其他日曜學校教師養成所用參考書を或は譯出し或は著作する計畫である。本書の飜譯は赤星仙太氏を煩はし、更に野邊地天馬氏の助言を得たのである。茲に謹んで兩氏に其勞を感謝する次第である。

大正十年十二月

日本日曜學校協會本部に於て

今村正一

目次

第一章　地理的背景……一

一　概括　二　聖書のパレステナ氣分　三　救贖目的と其背景　四　邦土の自然區劃　五　地中海沿岸の平野　六　エスドラ野―街道に當り屢戰場となる　七　サマリヤ路　八　ユダヤの靈的超越　九　ヨルダン河谷―宛然之れ障壁　十　東部の連山―比較的に沒交渉なる　十一　パレステナの風俗習慣　黑板及び地圖の作業

第二章　イスラエルの歴史……二一

一　人間歴史の端緒　二　族長時代總説　三　其の第一期―アブラハムの生涯　四　其の第三期―イサクの生涯　五　其の第五期―ヤコブの生涯　六　出エジプトの時代―モーセ傳の警見　七　ヘブル史上の一轉機　八　モーセの治績　九　士師時代必然の到來　十　聯合王國期　十一　王國分離期　十二　イスラエル王國(北朝)の略史　十三　ユダ王國(南朝)の略史　十四　バビロン囚虜

期 十五 復興期 十六 舊約歴史の目的及び使命

第三章 舊約の律法附制度……四〇

一 原始的の律法 二 其他の共通律法 三 律法以外の風習民俗 四 舊約律法の心髄 五 契約の書—十誡 六 幕屋と其の奉仕 七 レビ法典と其の活用 八 申命記と律法 九 律法發展の四階段 十 ヘブル法の道徳性

第四章 イスラエルの豫言者……五五

一 舊約本來の傳統たる豫言者 二 師弟承傳と聖靈の恩化 三 傳統の種別法 四 歴史的種別法 五 豫言者の外的特性 六 豫言者の内的特性 七 偽りの豫言者 八 豫言者の名稱と稱號 九 アッスリヤ時代の豫言者 十 バビロン時代の豫言者 十一 ペルシヤ時代の豫言者 問題と總括

第五章 イスラエルの詩人……七六

一 ヘブル詩歌の形式 二 ヘブル初葉の抒情詩 三 ダビデ 四 詩篇 五 箴言 六 ヨブ記 七 雅歌 問題

第六章 舊約聖書と初等科及び幼稚科……九五

一 舊約聖書と兒童 二 兒童のお話好き 三 舊約物語と幼稚科 四 舊約物語と初等科 五 物語の現實性 六 兒童向きの聖書詩 七 聖書の花鳥及び獸 問題と總括

第七章 舊約聖書と中等科……一〇九

一 中等科課程概論 二 記憶作業 三 舊約歴史と中等科 四 中等科時代の物語 五 英雄と英雄談 六 物語に含む個人的要素 七 自然界の教材 八 「神の家」としての愛敬會心 九 地理の適用 問題と總括

第八章 舊約聖書と高等科……一二三

一 高等科課程概論 二 教材としての傳記 三 舊約に於ける傳記の理想 四 兒童の世界心

と舊約聖書との交渉　五　記憶作業　六　社會的要素　問題と總括　四

第九章　舊約聖書と青年科……一三五

一　逸出期から批判期へ　二　教授の目的及び結果　三　舊約聖書の文學的卓越　四　舊約聖書のローマンス　五　奉仕の最高動機　六　メシヤ思想　七　傳道的精神の涵養　八　豫言及び詩歌の史的研究　問題と總括

第十章　舊約聖書と大人科……一五〇

一　大人と日曜學校　二　聖書特に舊約聖書の引力　三　日常生活上の諸問題　四　穩健なる哲學書　五　舊約聖書の社會教訓　六　メシヤ思想　總括と助言

舊約聖書總論

第壹章　地理的背景

一　概括

舊約聖書は三部分に別たれる。即ち、其の第一部は、イスラエル撰民の起源・發達・特徴及び神聖なる制度の述作であつて、其の第二部は、豫言者を代辯者として該民族に成された神との靈交の記錄であり、其の第三部は、神に歸依する者の衷情及び實生活の發露たる、詩歌箴言の如き宗教文學の蒐錄である。從つて、ユダヤ人は古來是等數十冊の正經(カノン)をば斯く三大部に分ち、それ〴〵に律法・豫言・聖文學(ハギオグラファ)と呼び來つたのであつた。而して、之等三者の獨特なる形式に文學的名稱を附すれば歴史と說話と詩歌となるのである。

Canon

二　聖書のパレステナ氣分

上掲三樣の互に異れる文學の間にも、自から其處に共通せるものがある。即ち、其の孰れもが皆、或る特殊の地方的氣分に依て一貫せられ、其の風土に基く無比の地方色に育まれて居ることである。故に此の邦土自然に關する透徹せる知識を有する事は、舊約聖書中の孰れの部分たるに拘らず、之を有効に敎授する爲めに必要缺くべからざる一條件である。

他の書物と同樣に、聖書も亦其のホーム若くは誕生地とも稱すべきものを有つて居た。然かも又、他の書物の場合とは違つて、此の搖籃の地こそは實に聖書の措辭成句に對して自から一定の形式または色彩を與へたのであつた。從つて、聖書の熟語及び形容は、極度に其の書かれた邦土の特徵や將た又其處に住める人民の習慣等を反映せしめて居る。

然ればこそ、古代イスラエルの邦土及び生活の如何を學ぶ事は、取りも直さず、

其の間に啓示せられた眞理の結構全體を理解するのみか、延いては、這般の消息に通せずしては、到底無意味たるべき夥しい隱喩や諷語の含蓄をも味讀せしめられる事となる。依つて以てパレステナと聖書特に其の舊約との關係の如何に濃やかなるかを察知せられるであらう。所詮、此の邦土と此の書物とは、恰度或る約定書に於ける當事者の如く離るべからざるものである。故に、舊約聖書の敎師に健實なる基本的素養を有たしむるには、パレステナ地理の徹底せる知識を有せしむるのが、其の當然踏まじめて置くべき第一歩なる事を、爰に繰返して置く。

三　救贖目的と其の背景

然は言へ、啻に聖書知識の理解の爲めのみならず、神の救贖の目的に對する其の邦土の關係如何を體得するは敎師にとりては更に肝要なることである。抑も、パレステナの研究とは、唯聖書の叙述の形式や其の歷史的皮相の事實を玩味する事のみで無い。實に幾百千年の間に漸次展開し來り、軈ては一つの世界的宗敎といふ絕頂

にも到達した、その道程に於ける幾多事蹟の演ぜられし舞臺として用ひられた邦土故、その土地は貴重なる事蹟と內的關係をば充分理解するのに必要缺くべからざるものである。蓋し「約束の地」は、自から其の歷史に對しても豫め或る種の型を與へて居るのであつた。卽ちエホバ神が嘗てアブラハムに向つて爲された「地上のあらゆる國民は彼れの裔に依つて祝福せらるべし」との約束の成就を有効ならしむるには、此の邦土の特質も亦實に與かつて力あるのである。其の位置又は地勢より推して、地球上、他の如何なる邦土と雖も、聖地としては此のパレスチナ以外に、幾世紀かの間に涉りて一つの純なる宗敎を準備し、以て其の宗敎をば全世界に公表せんとする神の御目的に露適應すべくも無かつたのである。

斯くの如き神の經綸をば充分了解し得る爲めには、先づ次に記す三つの事共を辨へて置かねばならぬと思ふ。

(一)神聖なる眞理發揚の爲めに、或る一民族が特に其の委托者として撰ばるべきであつた。而して此の眞理が純眞に保持進展せられる爲めには、其の撰ばれた民族は須らく他の諸民族よりして全然隔離せられて居るべきであつた。イスラエルは、果然、砂漠や河海及び山脈など自然の障壁に固められて、此の孤立の資格を完ふする事が出來た。

(二)當該民族は、世界の中心地域に其の地歩を占めさせられた。然ればこそ、時機一たび熟し來れば、今迄其處に抱擁撫育せられて居た救拯の眞理は、如何にも容易く且つ有効に全人類に公表せられる事が出來たのである。

パルスチナは舊世界の中心と言はれる、聖書世界の燒點なのであつた。而して、歐亞及びアフリカの三大陸の接觸地點に當り、一面から觀れば之等大陸の中立地帶とも喚ばれ得る程であつた。從つて、此のイスラエルは古代諸民族の眞中に位して世界的宗敎の四出的傳播の中心たるには、他の孰れの邦土にも優りて最も恰當の地歩を占めて居たと思はれる。

(三)斯く迄にして入念周到に準備せられた眞理の記錄は、如何にも世界大の傳播にふさはしいものでなければならぬ。即ち、這般の啓示を物語る此の書物は、地方的又は宗派的のものでは無く、全然普遍的の書物なのであつて、之が當然の歸結として、夫れは、あらゆる邦土のあらゆる民族に依つて容易く理解せられるやうな文風を有して居らねばならぬ。而して又、此の書物は、其の主要眞理に依つて宇内人心に訴ふる所あるのみならず、實に又、萬邦庶民の敏速なる理解を促進するやうな特質をも具備して居らねばならぬのである。

由來、パレスチナの地勢は、如何にも斯る書物の產出に甚だ適して居る。其の地域こそ如何にも狹小ではあるが、然かも猶、海拔實に九千二百呎のヘルモン山彙より海面下一千二百九十二呎と言はれる死海に至るまで、其の間、土地の高下に非常なる差違がある。而して、氣候の相違亦之に準ずるのであつて、高山的の酷寒より焦熱身を灼くばかりの暑さにも及び、之等の異つた氣温帶をそれ〴〵代表する動植

物の種類に至つては、實に驚くべき程の數に達し、自から全世界生物の尨然たる活標本室とも言ふべき偉觀を呈するのである。謂はゞ、パレスチナは宛然世界の縮圖とも觀られやう。從つて、聖書の中に充滿せる自然界の引例は、大概總ての風土の孰れかに當嵌まり、依つて以て何處の人にも理解を與ふる栞ともなつて居る。即ち聖書は世界の讀者をして懷しき故國の書を讀むが如き感を覺えしめる。眞に、聖書は「世界の書」である。

四　邦土の自然區劃

斯る次第であるから、舊約聖書の文風に對する其の邦土の影響と、從つて神の大經綸の發動上に及ぼす其の關係とを指摘し、此の方面に對する生徒の興味鼓吹に努むれば、之等地理上の材料を實際に把握するに連れて、敎師は自から、此の邦土の自然區劃といふ主題に對しても、尠からず寄與する所ある事を見出すであらう。抑も、パレスチナの地形たる、南北に縱割りしたやうな四つの並行地帶から成り立

つて居る。其の二つ宛が交互に、高地であり又窪地である。先づ、西の方から說明すれば、第一に地中海に沿へる低地がある。次には其の東に、偶々高さ三千呎にも達する急轉斷續せる山地があり、猶又其の東には、ヨルダン川の流域に當る大窪地があつて、最後には一番東に、ヨルダン川と其の東の砂漠との間に高臺が存するのである。

以上の各地帶に於ては、其の土地と事件とが宛かも楔の如くに互に嵌まり込んで居るから、敎師が實際之等の三區劃に就て一層巨細の敎授を試みる場合には、夫れ等の肝要なる事を逐一說示するのが至當であらうと思ふ。

五　地中海沿岸の平野

餘り高低とても無い至極緩やかな波動を有し、其の兩端に於て幾分か打開けて居る此の地中海沿岸の平野は、自然、アジアとアフリカとを繫ぐべき橋梁にも當るのであつた。而して、隊商や軍隊等が之等の兩大陸の間を來往すべき街道は、其の平

野を稍斜めに南北に過ぎて居る。爰に、此の邊一帶の平原地方がイスラエルの歷史に貢献し得た所以も窺はれるであらう。即ち此の街道に依つて、ペリシテ人は到頭ギルボア山にサウロ王の軍勢を潰滅せしめたのである。又此の街道に沿うて、テグラテ・ピルセルや、シャルマネザルや、サルゴンや、セナケリブや、ネコ王や、さてはネブカドデザルなどの物々しき敵軍の過ぎるのに對し、疲弊困憊してゐたユダヤの人民は何時も驚駭の眼を睜はつた事であつた。蓋し、當時に於ては此の街道こそは實に天下の公道なのであつた。

抑も、此の地方一帶の海岸線の最大特色は、其處に良港の全然皆無なる事である。元來、ヘブル民族は、其の國語に於て「港」といふ言葉を有つて居ない。夫れに該當すべき場所が無かつたから自然之が名稱も不必要だつたのであらう。故に、彼等にとりて、海は當然障壁であつて、決して天下の公道にはならなかつた。地勢は斷崖といふほどの險岨な所はなく、寧ろ坦々たる長汀曲浦である。しかしイスラエル

をば全く其の西方世界との交通よりして隔離し去つたのであつた。此の邊實に新約に於ける普及と對比して、この隔離こそは本來舊約聖書に於ける主要觀念であつた事を、如何にも巧みに物語つて居ると思ふ。卽ち、神の定め置かれた時機方に熟し來つた其の時、福音の西方に及び得べき門戸を開く爲めにとて、始めて其處に無意識ながら神意を果すべき一つの器として一人の偉人を起されて居る。彼のヘロデ大王の如きは、基督敎の味方ではなかつたが、パレスチナにカイザリヤの港を設けた。之れ、該地方に於ける史上最初の港らしい港なのである。斯くて、異邦の大使徒たる福音宣傳の第一人者パウロに至つては、イエス・キリストの十字架を高く揭げて終に西方世界へと進み出たのである。

六　エスドラ野——街道に當り、屢々戰場となる

之は、中央山脈の重疊せる連續を打破して、海岸よりヨルダンの流域へと劃然たる通路を與ふる、略ぼ三角形を成せる一大平野なのである。其處には自から五つの

門戸があつて、其の三つは恰度三角形の三頂點に當り、他の二つはエズレルとメギドとである。之等は卽ち、アジアよりアフリカへの大道の關門であつて、彼の掠奪好きなベドヴィン人達が屢々此處を通じて東方から押し迫り、諸大國の軍隊亦幾度と無く其の雲霞の如き雄姿をば此の道筋に現はしたのである。然ればこそ、其の間に貽された史實は、自から戰爭の歷史に外ならなかつた。而して、此處での戰爭は、デボラとバラク（士四—五章）・ギデオン（士六—七章）・サウロ（母前二十八—三十一章）・ヨシア（王下二十三章二十九—三十節）を主人公とする四回行はれイスラエルは其の中で二回勝ち、二回負けたのであつた。

七　サマリヤ路

サマリヤが歷史上に及ぼし得た其の地方的特色は、其の地勢の如何にも廣豁なる事である。成る程、其の西には幾らか低い山脈もあるが、之とても猶、敢て海岸への坦々たる一路を妨ぐる程では無い。多少嶮岨なる其の東方に於てさへも、「エフラ

イムの山路通ひ」は道幅も可なりに廣くして、勾配亦從つて緩やかなのである。而して、中央に當る山添ひには處々に點在して、平野もあれば牧場もあり、また空谷などもある。夫れ故、此の邊一帶は兵車を通ずるにも甚だ便利であつた。一體、「舊約聖書に於ける遠征は、皆此のサマリヤを舞臺としての事である」之が當然の結果は反覆果てしも無い敵の侵入であつて他の結果は即ち、今猶變らぬ東部パレステナとの連絡上の便宜であつた。蓋し、サマリヤの坦路と其の數多きヨルダンの渡津とは、之を遙か其の南なるユダヤに於て、嶮峻なる深谷と危險にして然かも寥々たる渡津とが其の東との間をば殆んど隔離して居るのに比して、如何にも甚しい反襯であると言はなければならぬ。斯くも廣豁極まれるサマリヤの地勢の他の影響は、四隣の異教主義が何の遠慮會釋も無しに、此處の寛容なる生活に浸潤し來りし事、之が當然の結果として、實に目まぐるしき程に此處サマリヤの主權者は其の系を變へざるを得無かつたのである。即ち、南方のユダ王國が全然唯一系の王朝であつたの

に對して、此の北方イスラエル王國は前後九王朝にも及んで居る。而して、此の北王國の方が却て、南王國の滅落に先だつ事實に一百有餘年にして、夙くも敢果無く滅び失せたのであつた。約言すれば、彼のスミス教授も言つて居る通り、サマリヤはユダヤよりも一層、進擊には案外優勢であり得たが、退守にはいたく不利であつた。此の背景に緣故ある史的說話には、ベテルのヤコブ（創二十八章十—二十二節）・シケムのヨシユア（申十一章二十六—三十節、廿七章九—二十六節、書八章三十—三十四節）・シロのサムエル（母前一—四章）・カルメル山のエリヤ（王上十八章）・サマリヤのエリシヤ（王下五章）・エズレルのエヒウ（王下九章）等がある。

八　ユダヤの靈的超越

抑も、ユダヤは此の邦土の中心、永續せるダビデ王朝の宮居所、神殿の所在地、而してまた、重なる全豫言者達の生存地なのであつた。ユダヤは孤立して他より何等の干渉を蒙らず、全然偏狹保守であつて、一番永く世界的の氣分と遠ざかつて居

つたのである。此の岩石の多い高地の邊境や城塞は、研究上甚だ價値が多い。其の中で、一番近づき易い邊境は北方に當り、從つて此處で幾多の戰爭が行はれたのであつた。蓋し、ユダヤは宛然一個の堡壘で、之が奪取には隨分困難ではあるが敢て難攻と言ふ程では無い。要するに、此の地方の特色としては、其の牧羊上の特徴（詩二十三篇）と、及び其の葡萄栽培（民十三章二十三節）と、及び其の本來の一大都市の發達に不適當なる事等である。世間とは全く懸け離れて、水利にも乏しく、何處に通ふと言ひ得る程の大道往還とても無い。けれども爰に一つ、ユダヤの僻境にも、世界に向つて其の眞市民たるべきの公義心を敎へ、且つ、此の地上に期待せらるべき理想の都市に對して其の名を與へた都市が終に起つた。夫れは、外ならぬ新しきエルサレムである。

ユダヤ地方を其の背景とせる舊約說話としては、ヘブロンのアブラハム・ベツレヘムのルツ・ミクマシのヨナタン及びエルサレムのダビデ等を擧ぐる事が出來る。

九　ヨルダンの河谷——宛然之れ障壁

重にガリラヤ湖南のヨルダン下流は、パレスチナにとりて一つの境界若しくは障壁と思惟せられて居る。故に、此のヨルダンといふ名稱は、始終「まで」とか、「を渡つて」とか、又は「過ぎて」とかいふ前置詞に支配せられ勝ちなのである。元來「ヨルダンの誇り」（直ちに「叢」と譯し去るは妥當ならず）とは其の兩岸に繁茂せる草叢を指すのであつて、常に困難と危險との象徴とせられたのであつた。（耶十二章五節及び四十九章十九節參照）

此の界隈に關はる說話には、平原都市の陷落（創十九章十七—二十九節）・イスラエルのヨルダン渉り（書三章）・エリコの陷落（書六章）等がある。

十　東部の連山——比較的に沒交渉なる

東部の高地は概して水もいと潤澤に土地亦甚だ豊饒ではあるが、如何せんヨルダン流域の峽路なるが故に、聖地の心核から全然隔離せられ、ヘブル民族史の徑路に

對しては比較的に影響する所も少ないのである。

然かも猶、其間に、ペニエルのヤコブ（創三十二章）●イスラエルの征服（申三章二十六—四章十七節）●アブサロムの敗北（母後十八章）の如き說話が貽されて居る。

十一　パレステナの風俗習慣

既に述べ來つた通り、パレステナ其のものが充分に汎世界的の特質を備へて居る所よりして、斯る自然の光景の裡に物せられた聖書の文は、世界到る處の讀者に容易く理解せらるべきは素より其の所なのではあるが、然し、此の謂ゆる聖地人民の風俗並に習慣となると、事情は自から異つて來るのである。蓋し、舊約聖書は東洋に產出せられた一書物である。從つて、其處に記されて居る生活相は當然東洋生粹のものであつて、西洋の夫れとは全然本來の面目を異にする。

夫れ故、其の殆んど總てが西洋人の經驗等とは無關心のものであり、且つ夫れはまた、昔から今まで大體何等の推移も變化も無しに打續いて來たのであつた。斯く

言へばとて、外來の資本主や移住者等は成る程、幾分か現代式を此處に輸入したでもあらう。特に大都會に至つては、鐵道とか電信とかホテルとかいふものが設けられたに相違無いが、然し、之等とても人民の集團たる其の家長制度的の慣習には殆んど何等の交涉も無い程なのである。然れば、現時のスリヤ旅行者は今猶眼のあたり、天幕の入口にアブラハムを見、外人の近づくので急ぎ顏蔽ひするリベカを見、泥塗みれの手で挨拶するボアズを見、さては駱駝に乘つたミデヤン人の長い隊商列や、死者の家に嘆く眞似する慟哭者や、婚姻の華々しき行列は愚か、山際に己が群を守れる牧羊者の寂しき姿抔さへも、如何にもあり〳〵と昔ながらのさまで眺められる。蓋し、人々の擧措全般は、今更に舊約聖書に就ての好脚註なのである。故に聖書の記載を充分に理解するには、聖地に於ける日常生活の精細なる知識が絕對的に肝要である。之れ無くしては到底、其の意味を闡明し、其の難解を除去し、進んでは、其の光景を描寫し又其の美觀を現實に爲し得ん事、殆んど不可能である。舊

約の研究者は、豫め這般の消息に通じて居らねばならぬ。

黒板及び地圖の作業

師範科に於ては、聖地地理上の根本知識ならば何に限らず當初に先づ會得し置き、其の輪郭的形狀や主要地の位置杯を各自の胸裡に把持せしむべきである。有り觸れた經驗に徴すれば。師範科に於ける斯種研究の第一時間目は得て徒費せられ易く、何等學課の指定や準備無しに終り勝ちである。然し、決して此の過ちを繰返してはならぬ。始めに黒板次には地圖として、下記の諸點に就ての徹底的練習を爲し得る樣、最初の全時間を獻ぐべきである。而してまた、級生各自をして、海岸線・河川・自然區劃・山脈及び左に示した諸點などを書き込んだ自製の暗射地圖を携へ來らしむるが宜い。爰には、ホールバットの「聖書地理撮要」から抄記して置く。

一、線 ——（イ）海岸線　百八十哩、港無し。

（ロ）ヨルダン川　百六十哩、流域顔る彎曲。

二、水面 ——（イ）地中海　又は「大海」。

（ロ）メロム湖　「高き」を意味す。

（ハ）ゲネサレ湖　新約にては「ガリラヤ湖」。

（ニ）鹽の海　「死海」として知らる。

三、自然區劃 -（イ）沿海の平野。

（ロ）西方の高地。

（ハ）ヨルダンの谷。

（ニ）東方の高地。

四、山 ——二つ宛四對を擧ぐ。二つ互に其出來事の關聯せるも面白い（内、二つは新關係）。

（イ）ヘルモン（變貌）とレバノン（杉）。

（ロ）カルメル（エリヤ）とギルボア（サウロ）。

（ハ）エバル（呪詛）とゲリジム（祝福）。

（ニ）オリブ（昇天）とネボ（モーセ）。

五、地點 ——出來事の關聯せるを括弧にでも入れて並記する。

沿海の平野

（イ）ガザ＝サムソン。

（ロ）ヨツパ＝ヨナ。

（ハ）ツロ＝海上貿易。

西方の高地

（イ）ベールシバ＝南の國境。
（ロ）ヘブロン＝家長達の墓。
（ハ）ベツレヘム＝ダビデの故郷。
（ニ）エルサレム＝首府。
（ホ）ベテル＝ヤコブの夢。
（ヘ）シケム＝北王國、最初の都。
（ト）サマリヤ＝北王國、後の都。

ヨルダンの谷

（イ）エリコ＝城壁の陷落。
（ロ）ダン＝北の國境。

東方の高地

（イ）ペニエル＝ヤコブの角力。
（ロ）ラモテ・ギレアデ＝エヒウ瀉膏せらる。
（ハ）マハナイム＝ダビデの本營。
（ニ）ヤベシ・ギレアデ＝サウロに救はる。

第貳章　イスラエルの歴史

舊約聖書の研究者は、其の各冊別にしても將た又種類別にしても、それ〴〵特殊の目的があつて書かれたもので、唯單に歴史上や科學上などの理由に依つてのみ書かれたのでは無いといふ事を、是非共確かに憶えて居らねばならぬ。舊約聖書は宗教上唯一の目的を有する書物なのである。

偖て、取扱上の便宜と觀察上の明確とを期する爲めには、其の歴史的方面を次の如く五つの時期に分つ事が出來るのである。

（一）諸民族時代。
（二）族長時代。
（三）士師時代。
（四）王朝時代（イ、聯合王國期。ロ、分離王國期。）

（五）追放並に復歸時代。

【壹】諸民族時代——創一—十一章

一　人間歴史の端緒

世界の開闢を記せる創世記第一章は、實に聖書中に於ける一大奇跡である。而して、其の出來事の順序に關しては、大體は科學の認める所と同樣であつて、地上に於ける生物發達上の普通唱導せられて居る順序と略ぼ其の符節を合せて居る。彼の無限の靈が原始的の水面を蔽ふたといふ事も、今日の科學者にした所が、此の記錄に對して挑戰すべく何等確實なる論據を見出し得ぬ程であつて、ましてや當時の記述者自身に於ても毫末も其の念頭に遲疑する所が無かつたのである。

抑も、我等人類最初の家族の起源即ち原始ホームの搖籃は、實にアジアの西方、チグリスとユーフラテスとの河谷に位して居つた。人類當初の發達。兩性の平等互

助的信賴。害惡の起源及び傳播。處罰的又は洗滌的なる大洪水並に人類の第二起源と三大陸近接地方に於ける其の子孫の散布等に就ては、明確に然かも興味深く創世記卷頭の十一章中に記されて居る。

【貳】族長時代——創十二章—出十八章

二　族長時代總說

我等は、彼のアブラハムの召命を境界として、創世記中の一層親しみ多き場合に入つて行く。而して、之等族長記錄の大部分は、比較歴史や考古學に依つて非常に其の確實性を認められつゝあるのである。

本文は自から次の五部分に別たれる。即ち、アブラハムの生涯（創十一章廿七—十五章十一節）・イシマエルの生涯（十五章十一—十八章三節）・イサクの生涯（廿五章十九—卅五章四節）・エサウの生涯（卅六章）・ヤコブの生涯（卅七—五十章）之

である。此の時代の中、創世記の部分は右に掲げた段落に從つて研究するのも一方法であらう。

三　其の第一期—アブラハムの生涯

此の時期は、人類歴史上、重要事件の一つたるアブラハムの召命、卽ち、前名アブラムがカルデヤのウルを出で、バビロン文明の骨子たる進歩的多神敎を後にして彼の唯一神的の信仰を保持したる重要なる記錄を傳へて居る。然し、其の記錄とても猶、果して何時又幾歳にして彼がウルの地から召し出されたか、乃至は、彼が其の父及び兄弟ナホルと共に果して何年間の久しきに亘つて同棲して居つたか、其の邊の仔細は一向に判らぬ。唯明瞭なのは、アブラハム七十五歳の時、ロトと共に進んでパレスチナ方面に赴くべく、途上ハランに於て一層鮮やかな召命を蒙つた事だけである。

斯くて、是等の來住者は啻に該地方の邊境に停らず、轉て之が中心地方へと突進し、シケムよりベテルにかけて其の天幕を張り、現に自分達が起臥して居る其の邦土を懇望しつゝある徽號にとて、エホバ神の爲めに之が祭壇をば其處に建てたのである。既にして大饑饉が起つた爲めに、彼等は其の生命保全の目的でエジプトに落ち延びた。饑饉回復後ベテルに歸り、アブラハムとロトとの兩人は互に同意の上で袂を別つ事となり、ロトの方が先づソドムゴモラを含める沃野を撰んだ爲め、アブラハムは一層南下して昔のヘブロン附近に居を定め、其處にエホバの祭壇を設けて之に齋き仕へたのである。

バビロン王の侵入から延いて、ソドムに於けるロトの悲哀・ハガルに依つてアブラハムにイシマエルを賜ふ約束及びサラ懷姙の約束・平原都市の陷落・ロトの逃亡・イサクの誕生・其の燔祭・サラの死・イサクの從姉妹リベカとの結婚・アブラハムの死と其の埋葬等、之等總てに依つて、信仰の父アブラハムの傳記が完成せられて居るのである。

四　其の第三期—イサクの生涯

イシマエル及びエサウの生涯に關する部分は、姑く爰に省略して置いて宜い。然し、之等兩者の間に介在せるイサクの生涯に至つては、南カナンに於てアブラハム系の一族が裕福又堅實に發達しつゝあつた事を示して居るのであつて、到底之を閑却し得べくもあらぬ。一體、イサクは如何にも沈靜平和の人ではあるが、猶且つ其才能と節約との故を以て全族の所有を加へ財產を增し、從つて約束の地に關はる一同の要請をも叶へ得たのである。而して、此の一段の大部分即ち廿九—卅六章は、イサクの雙生兒エサウとヤコブとの活畫的物語乃至彼等の抗爭の記事を以て滿されて居る。

五　其の第五期—ヤコブの生涯

ヤコブ傳の記錄は最後で然かも最長の部分であつて、其の實は殆んど全部を擧げて彼れの愛子ヨセフの物語なのである。即ち、此のヨセフが兄達に虐げられて奴隸に賣られた事・困難に耐へ不幸に打克つて、エジプトに其の勢威漸く揚がり來つた事・終に其の母國に殘し置いた親兄弟に饑饉救濟を遂げ得た事や、さては此のヨセフに慰撫せられてヤコブ一族がエジプトに移住するに至つた事抔、孰れも皆、世界文學中での最も美はしき物語として累々珠を成して居る。確かに之等の物語は驚嘆に値するものゝみであつて、到底敎師の看過し得ぬ程に暗示に富んだものである。其の夢物語の間にも溢れて居る若き貴公子、さしもの自負心が奴隸生活の辛苦や卑下故に謙遜ならしめられた事や、其の成功の秘訣が「エホバはヨセフと偕に在り」しに基く事を始め、見證の記錄たるエジプトの生活及び慣習の確實なる描寫抔、隨所にとゝ〴〵讀者を魅了せねば止まぬ趣が存して居る。

六　出エジプトの時代—モーセ傳の瞥見

斯くて、モーセの時代は、出埃及記の第一章に始まる。而して、ヤコブの子孫即ちイスラエルの異常なる增殖を妨止すべく、治者エジプト人から彼等が受けた苦難

の數々を冒頭として、幼兒モーセが攝理的に奇しくも避難生存せしめられた事に及び、此の兒成人後に同胞解放の使命を果たす爲めの準備●十の禍の間に仄見ゆる王前に於けるモーセとアロンとの確執●出エジプト及びシナイの旅行等、次ぎ〳〵に其卷頭十八章を占めて、族長時代の大切の幕を閉ぢて居るのである。

【參】士師時代——民族國化の初期

七　ヘブル史上の一轉機

抑も、出埃及記の第十九章は、ヘブルの歴史上に一新時期の發端を劃するのであつて、其の以前の歴史は、概して族長時代の素朴さを以て猶未だ放浪しつゝあつた民族又は民族集團をば取扱つて來たのであるが、此の十九章以後は、專らモーセやヨシュアを始め士師として知られた其後繼たる偉大なる指導者達が、漸次國家組織の創業に與かつて居るのである。斯くて、此の時代はサムエル執政の曉にも及ぶのであつて、此の人に依つて最初の王が即位した事は、サムエル前書の十二章に記されて居る。

八　モーセの治績

モーセの治下に於て始めて、イスラエルは憲法及び法律を有する一個の政治的民衆となつたのであつて、此の律法は通常モーセ法と呼ばれ、其の中には政治上道德上及び宗教上の巨細なる規定を含んで居る。而して、互に嫉妬深く、如何にも性急で、且訓練にも乏しい該民族をば、斯くして緻密渾然たる一組織の下に齎らし得たモーセ這般の成功は、最も傑出せる英雄又建國者として彼を顯著ならしめた事である。成る程、彼れ自身は其の民を約束の地に導き入れ得無かつたが、時方に入國の夕に逝いて、此の凱旋の務を其の高弟たり又部下の主將たるヨシュアに委ねた事であつた。

九　士師時代必然の到來

モーセとヨシユアとの强き腕が、死に依つて其の征服事業から相次で移し去られた後ち、危うくも分散瓦解の時代來り、折角に萠ざしかけた國家組織も殆んど壞頽し去らんかと思はれる程に、支族的の對抗や偏執の無政府主義抔が促され來つたに拘らず、肝腎の一般人民の方は侵入する敵前に、全然何等の用意とても無しに放置せられて居つたのである。然るに、恩寵なるかな、此の敵者侵犯若しくは抑壓の危機に際し、「士師」と呼ばれた精神界の撰手達は、それ〴〵に天賦の武力をさへ巧みに適用して、其の同胞民族をば解放に導くべく、蹶然相踵いで起つに至つた。彼等が此の間に於ける幾多功業の記錄は、士師記の全體及びサムエル前書の十二章までに見出される。

【四】　王朝時代と豫言者

十　聯合王國期

蓋し、豫言者の祖ともいふべきサムエルは、此過渡期にふさはしい特性を有して居つた。彼は、イスラエル民族全體をして、一層緊密にして然かも進步的なる國家組織たらしめたのである。即ち、彼等が之を指導すべき權威ある王者を要求した時に、サムエルは乃ち神の聖き導きのまに〳〵サウロをば彼等に與へたのであつた。此のサウロは不幸にして歷然失政の跡方を貽したのではあるが、夫れさへ、軈て來るダビデの衆望と成功とに對して、好個の遠景たる事を得たことも言はれやう。抑も、サムエル執政の記錄はサウロの夫れと混淆し、從つて、サウロのも亦ダビデのと混淆してサムエル前書に記されて居るが、其の間自から、支族對抗の混沌期よりして、ダビデ治下の聯合王國へとの國家發達に關する逸出せる見解をば、此の時代の研究者に對して提供し得るのである。

サムエル前書に於ては、サムエルの幼少時代とサウロ王に對する交渉とが記され

て居る、ダビデ其の人の後年の治世史は、嚮てサムエル後書に於ける中心問題として示されて居る。また、彼の歴代史略上の後半にも此のサムエル後書との並行記事が見えて居る。ダビデは實に、イスラエルの諸支族をば搏つて一團とし、以て之を國民意識のある組織的民衆たらしめたのである。加之、彼は此の新王國の領域を擴大して、末終には其勢力遠くエジプト境よりユーフラテス河畔にも及ぶに至つた。蓋し、此のダビデは舊約書中での好愛すべき人物で、彼は民の心を想ふ以上に神の心に副ふた。要するに、ダビデは其の同胞のメシヤ的希望に對して王者の型を賦與し得たのみか、爾來幾時代かけて這般の理想を憧憬せしめた事であつた。

偖て、ソロモンは神殿を創建して之が奉仕の道をば制定した程であるから、其の治世に關はる記載は舊約書中で甚だ興味深き個所なのである。のみならず產業の發達・政治機關の中央集權及び國民に對する外來の感化の展開等にも、其の事業は多少の關聯を有して居た。然かも、此の時既に夙く滅落の途に就いて居たので、ソロ

モンの死後、直ちに往時の種族的嫉妬再燃して、國家は復もや、其の數こそ南北の二つに過ぎざれ、支族的集團に解體し去つた事である。

十一　王國分離期

ソロモン王の無主義及び壓抑は、端無くもユダ族に對する敵意を增大せしめ、彼のエフライム族を旗頭とした謀叛的分立の機を熟せしむる事となつた。此の革命も敢てダビデ王家を全然顚覆するには至らなかつたが、其の結果として、統治權は重にユダ族とレビ族とのみに制限せられるやうになつたのである。斯くて、エフライム人ヤラベアムに歸服せる他の十族は、シケム及びテルザを首府として、一層有力なる王國を成立せしむる事を得た。其の後約半世紀の間、サマリヤはオムリ王の治下に於て北王國全體の首府となつたのである。是等の南北兩王國の歴史は列王紀略上の十三章より同下十七章までに記されて居る。而して、歴代誌略下の十一―廿八章には列王紀略の記事と並行する一層短簡なる記事が見えて居る。

十二　イスラエル王國（北朝）の略史

此の王國の壽命は、紀元前九三三—七二一年の二百有餘年間であつた。此の間、少數の簒奪者を除いても猶七代の王朝に統治せられたので、是等の王朝はそれ〴〵ヤラベアム・バシヤ・オムリ・エヒウ・マナエン・ペカ及びホゼアに始まつて居る。此の王國も、其の內に驕奢、外は誇張之れ事とした點では、アハブの時（七七八—七五四年）を絕頂とし、武力領土の擴大乃至政治的感化の點では、紀元前第八世紀の前半、エホアシの晩年及びヤラベアム第二世卽位の當初を其の最大限としたのであつた。而して、紀元前七二一年、イスラエルの他の部分が既に奪略せられた後ち、都サマリヤも終にアッスリヤ軍の陷落する所となり、爰にイスラエル王國も其の歷史の終末を告げたのである。

十三　ユダ王國（南朝）の略史

かのヤラベアム治下の北王國と其の時を同じうして、ソロモン王の子レハベアムに始まり、實に一百三十五年も打續いて、其の間終始一貫以てダビデ王家に支配せられ、歷代の治績亦概してイスラエル王國の夫れよりも一層永續して且つ鞏固であつた。蓋し、此の王國は表面上では頗るエホバに忠誠であつて、少くとも神殿の禮拜とモーセ法との形式丈けは支持して居つたのである。

王國は、紀元前五八六年、エルサレムの陷落に際し、ネブカデネザルの軍隊に依つて終に滅亡を招くに至つた。抑も、之等兩王國分立の時代は舊約史上殆んど隨一とも言ひ得べき程興味誠に深い境地であつて、事件の進行如何にも劃的に見る眼も眩ゆく、人となりの展開も從つて其の間に躍動し、之等の人物に於て現れた道德的又心靈的の價値亦甚だ逸し難きものがあつた。サマリヤの陷落とエルサレムの陷落と、之等一對の二大カタストロフは、研究上又敎授上に於て、如何にも優秀なる旋回點として無限の價値を有して居ると思ふ。

【五】追放並びに復歸時代——祭司と執政者

十四　バビロン囚虜期

エレミヤ・エゼキエル及びダニエル等豫言者の書物に於て、此の時期の事柄が學ばれる。歴史書の方では、唯多少の暗示あるのみで、毫も有力なる材料と爲すに足るものが無い。由來、民族中での極貧者のみがパレステナに取り殘され、賢明にして有爲の才を含む階級に屬する者は皆囚虜として遠く送致せられたので、彼等固有の宗教も將た慣習も纔かに漸く其の眞髓の一短を保持し得たに過ぎなかつた。彼等は間も無くバビロンの生活相に馴れ果てゝ甚だしく外延的となり、彼のクロ王の勅令でゼルバベルとエズラとに相次で嚮導せられて、謂ゆるカナンの地に赴く際、其の歸國を喜ぶやうな者は極めて少數であつたと傳へられて居る。

十五　復興期

紀元前五三七年に王族ゼルバベルと、同四五八年に祭司エズラとに依れる前後二回の重なる解放運動に基き、猶ほ、四四四年頃のネヘミヤの場合をも附加せられやう。而して、之等の復興期に關する努力の記錄はエズラ・ネヘミヤの兩書に含まれハガイ・ゼカリヤ・マラキの豫言にも見えて居る。斯くも其の同胞が母國復興の衝に當つて居る折柄に、東方に居殘つたユダヤ人達の試煉や榮達の活畫は、情景共に目覺ましきエステルの劇的物語に示されて居る。

序ながら爰に附言して置くが、舊新兩約の中間に介在せる物語は價値頗る重大に興味亦深甚であつて、ユダヤ民族史上の關ケ原とも觀るべき程の事件は、此のギリシヤ・スリヤ及びロマ治下の時代に關係して居る時代であつて、しかも舊約聖書に載せられてはゐない。

十六　舊約歴史の目的及び使命

之は、文書や文學としての寄與以上に、研究上頗る肝要なる要素である。即ち、其の目的又使命は、明確に萬國民をして神の眞と愛とを知得把握せしむべく、特に地上の諸國民中より、イスラエル民族を拔擢準備せんとの聖旨の徐次的發達を示して居る。而して又、其の歴史の實際は、該民族が如何に世界の諸民族の間に導き入れられたか、其の使命を成就する爲めに最大絶好の機會を與へられたか、然かも其の使命に就て如何に失敗して居るかを物語るのである。此の間の苦闘其のものが、自から、豫言書・詩篇及び知慧文學に現れたやうな心靈上又倫理上の價値、類ひ無き舊約文學をば産み出したのである。要するに、舊約聖書究竟の目的は、新約に於ける「獨子」を通じての一層明白なる神啓の準備に外ならぬ。

總括及び暗示

(一) 舊約歴史書の特性及び眞目的如何。

(二) 歴史的材料の時代別と、其の各時代に於ける指導者又は頭首とは、研究者の心裡に始終明確であらねばならぬ。

(三) アブラハム・モーセ・サムエル・ダビデ・ヒゼキヤ及びネヘミヤの如き人物の樞軸的天性や、彼等が實際に果し得た奉仕等は、歴史的領野に於ける里標とも爲され得る。

(四) 舊約歴史の靈的使命、並に國民の興亡に關はれる劇的で且つ刺戟性に富む運動等に就て、各自明確なる概念を有して居らねばならぬ。

第參章　舊約の律法附制度

抑も、舊約聖書の律法は、別段一個所に纏めても居られず、まして一大法典としての蒐集も試られず、唯重に舊約卷頭の數冊の間から此處彼處に拾ひ上げられるのである。通常律法の五書と呼ばれて居る謂ゆる「五經（ペンタチューク）」にしても、存外其内に、歴史や統計や詩歌までも含んで居る。而して、「契約の書」又はレビ法典のやうな一見結集的に觀られる部分でさへも、其實は他と同樣、歴史的結構の間に示されて居るに過ぎず、謂はゞ之等は何れも、旋回息む事無き歴史潮流のところ〴〵に出來た渦にも譬ふべきものなのである。

一　原始的の律法

概括して律法と言ふも、或る種の律法に至つては、人類の初葉以來傳へられた眞に原始的のものである。例へば、安息日の律法（創二章二―三節）の如き、什一の規定（創十四章及廿八章）の如き、ノアと契約せられた殺人刑法（創九章五―六節）の如き、奴隷に對する絶對權利（創十六章六節）の如き、皆然りである。而して、之等は十中八九皆、太古時代から傳つたものでヘブル民族特有のものであつた。

二　其他の共通律法

以上の如きヘブル特有の原始的律法以外、彼等の間に夙くも施行せられた律法又其の慣例は、何れも之と交渉濃やかであつた他の國民より借り來つたものであつた。例へば、敢て珍らしくもあらぬ割禮の儀式にしても、其の一たびアブラハム一族の間に入るや（創十七章九―十四節參照）、夫れは實に神聖なる命令としてであつた。蓋し、神に依つての指導若しくは認諾を得たといふ感念が、其の彼等に特有たると他國民と共通たるとに關らず、イスラエル民族の宗教的律法又は制度となるに必要なる條件であつた。後年、彼等がバビロンに移住して其の感化の裡に生活するや、バビロン民族の民法は自からヘブル民族にも影響を及ぼした。而して、モーセ

と關係のある法令の大多數は、ハムラビイ法典の律法と並立し、又彼のレビ法典の儀式的要素の中には、恐らくエジプト人が當時實際に行つて居つた儀式に暗示せられる所もあつたのである。

三　律法以外の風習民俗

斯く、記錄に藏められた原始の律法や他の諸民族から襲用したもの等の外に、猶ヘブル民族自らの傳統であり、若しくは其の移動の際に受けた感化の產物たる、數多の異風奇習とも稱すべきものがあつた。就中、祭節の祝典の如き、老父が子等を祝福する方法の如き、結婚の樂しき盛儀、さては苅入れれや穀打ちの社交狀態の如き、之等の大多數は何れも其の場所名目の異るに從つて、樣式亦種々なるものがあつた。

四　舊約律法の心髓

偖て、舊約書中で肝要なる律法集は、彼の出埃及記・利未記・民數紀略及び申命記の間に記されて居る謂ゆるモーセ法典なのである。然し、此の小なる本書の紙幅に制限があるから、著名なる該法典の起源を說明する爲めに、今爰で一層進んで批判上の論議を試みる事は出來ぬ。

五　契約の書—十誡

イスラエル人がシナイ山の麓に達して、爰に國民生活の端緒を開くべく、營を設けて屯ろした時に、其の各自が他の民族よりして聖別せられるといふ、嚴肅にして然かも緊密なる契約がエホバ神との間に取り交はされたのである。而して此の契約の個條は世に十誡として知られ、最も著名なる道德的の命令として編成せられて居る。元來、奴隷の境涯を今免れたばかりで、猶現に組織上悠久多難の道程に上らうとして居る人民には、豫備的であつて至極直截なる法典が必要なのであつた。我等は恰度夫れをば、十誡に直ぐ續いて出埃及記第廿一—廿三章に於て見出し得るのである。此の邊に列記せられて居る布告は、人民の權利特に弱者の保護と、牧畜農耕

上の財産權や、根本的なる道德律、及び二三の單純なる宗教儀式に關はつて居るのである。

六　幕屋と其の奉仕

イスラエル人のエホバ神との關係斯くまでに密接なるが故に、恰當充實せる禮拜儀式が始められる事、素より其の自然の數である。出埃及記第廿五—卅一章を見れば、モーセがエホバから幕屋の創設及び其の設備に關して命令せられた事が記されて居る。然るに、此の命令、端無くも一旦は、彼の黃金の犢禮拜に依つて妨げられたのであるが、危うくもモーセの仲保に依つて破滅の厄が遠ざけられ、次いで、此の神聖目的（三十二—三十四章）が阻害せられた其の代償にもと、彼のシナイ山で與へられた細目（三十五—四十章）通りに幕屋を完成して献納するやうにと促されたのである。

抑も、此の神の聖所たる幕屋に關聯して、當然聖き犧牲と之に献ぐる爲めに聖別せられた僧制とが存せねばなるまい。然ればこそ、利未記は實に、聖き犧牲（十七章）・聖き祭司（八—十章）及び聖き民（十一—二十七章）の三題目に大別せられるのである。

七　レビ法典と其の活用

通常、民數紀略は、出埃及記や利未記等と共に、祭司法典の一部として同一視せられて居る。唯、他の書物では或る種の必要なる用意を缺くことがあるのに、此の民數紀略のみは法規の實際適用上よりして幾分の變改が試みられて居るのである。即ち、神殿及び其處で執り行はれる儀式の保有方法・施行中に於ける幕屋の移動準備・祝祭季節に於ける犧牲奉献の特殊命令・最初の逾越に際して不淨であつた者の爲め第二の逾越祭・遁れの邑・女兒相續・嗣女の結婚さては間も無く征服せらるべき邦土の分劃の如き、孰れも皆其の適例である。夫れ故、民數紀略は「律法補遺」又は「實作用の律法」とも言はれ得る。而して又、我等は之れを「不信仰と不滿足

の書」と呼んでも宜からうかと思ふ。夫れは、新約の一記者が「彼等は其の不信仰の故に依りてカナンに入る事を得ざりき」と書いて居るからである。

八　申命記の律法

イスラエル民族が、進んでヨルダン河東にオグとシホンとの兩王國を征服し、將にカナンの地に入らんとするに際して、遺憾にも共々約束の地を踏む事を禁ぜられたモーセは、悲壯極まる最後の演說を試み、彼等が何時までもエホバに於ける信仰に肇く起ち、且つ、相互に同胞たるの義務を遂行するやうに鼓舞激勵したのであつた。蓋し、今は全く禮拜の中樞たるべき聖所に於て禮拜することに依つて、益々エホバ神への忠誠を篤くし、また「己れの如く汝の隣りを愛すべし」との命令を中心とせる國民の一致團結と、之等の主義原則は實に尤然たる此の申命記に於ける一對不離の大基調なのである。因みに、逐章的の分解を試むれば、本書は緒言に當る歷史的の復習（一—四章）と律法（五—二十六章）と其の補遺（二十七—三十四章）と

の三部から成り立つて居る。

蓋し、モーセとイスラエルとの離別の場面程斯る書物に恰當の題目とては無く、また斯る場面を描出するのにも此の申命記程恰當の書物とてはあるまい。要するに本書は謂はゞ民法の通俗化したものであつて、其の隣りに對する諸の義務・慈善上のあらゆる省察・個人及び集團の淨化・奴隷貧民並に旅人の權利等より、溯つては神の父格と人の同胞性までが、其の間に要約せられて居るのである。

九　律法發展の四階段

以上、記述し來つた所を總括すれば、律法は凡そ下記の四階段を以て發達展開したやうである。卽ち、其の初葉に當つては、未だ漸く國家組織が整うたばかりの人民を統轄して行く必要があつたから、其の律法も自然小引的又は綱領的のものに滿足せねばならなかつた。夫れは十誡をも籠めて普通に「契約の書」と呼ばれ、出埃及記の第二十章から同二十三章までに亘つて居る。第二には聖所と祭司とに關はれ

る律法であつて、出埃及記や利未記の中に其の殘影を留めて居る。第三には實生活化された律法であつて、曠野生活に基く當然の必要よりして補遺せられたものもあり、民數紀略が最も之に緣故深かつた。而して最後には實に偉大なる心靈的又社會的の基本的律法なので、夫れは申命記の領分なのであつた。此の邊の相違に據る爲か利未記は祭司の敎典と呼ばれ、申命記は民衆の律法と稱へられて居る。

十　ヘブル法の道德性

「然るにても、之等總ての犧牲や儀式及び使命は本來何處にあるか」と、頗る包括的な難問を發せられる事が偶にはある。然し、之が答辯は頗る簡明なのである。其れは徹頭徹尾皆、當代の唯物主義の打算性と異敎禮拜の卑俗とに反抗して心靈主義をば振作勃興せしめようとの計畫に外ならなかつた。蓋し、イスラエル民族全體を一單位として其の間に神意が實現する爲めには、先づ第一に各支族を團結せしむる必要がある。仍で、奴隷の好遇や貧民に對する親切や高利禁制等の方面に於て、是非共同胞主義が力調せられねばならなかつた。エホバに奉仕し又エホバを表示すべき彼等一同に對しては、何事にも優りて神聖といふ事が要請せられた。そして之れは道德的秩序の全般に亘る根本要素で、國家を高めて其の民を喜ばしむべき正義其のものである事が、明確なる事實として絶えず實證せられたのであつた。而して、愛が萬法中での最高原則なる事が、總てに對して了解を促され且つ其の實行を要請せられて居る。要するに、律法は神聖なる先見を以てイスラエルに賦與せられたのであつて、夫れは彼等が稍ともすれば陷らうとした信仰放棄の傾向を防止し、それのみか道德的の必要にさへもしつくりと適應して、猶且つあらゆる靈的理想の實現をも後援すべく、與かつて大に効力があつたのである。

【附說】舊約の諸制度

イ　家庭　抑も、家庭といふ事は、敢て他の古代國民及びその當時の文明に於て

全く不知案内であつた譯では無いが、就中、舊約聖書に代表せられて居る彼のヘブル民族に於て格別に著しい特徴を帶びて居つたのである。元來、人類の最初は國民又は民族なるものなく家族に依つて代表せられたのであるが、特にヘブルの家族は他の民族同樣に當該團の間に展開はしたものゝ、此の民族に於ては寧ろ、家族の組織及び精神が單に一國の範圍に拘泥せずして、一層偉大且つ開豁なる同胞主義として繼承せられたのである。然ればこそ、十誡は言ふも更なり、他のあらゆる律法皆一として家庭を高唱せざるは無く、所詮、家族といふものは善惡共眞に斷ち難き繫ぎとなつて居つたのである。例を擧ぐるならば、アカンの一族は彼と共に滅び、ダビデの一族は彼と共に祝せられて居る。蓋し、家族は國民の根底であつて、又それは、個人としてゞは無く、社會其のものゝ單位なのである。而して、信者といふ程の信者は皆、其の家族の名に於て又其の家族の一員として祝福せられた。爰に、彼の契約の本義も籠つて居るのである。要するに、「家を興す事」即ち家族といふ事が

イスラエル最高の渴仰なのであつて、家庭に關はる其種の氣高き概念よりして推斷し來れば、彼の「天父の家には第宅多し」との新約の敎訓も亦容易く領かるべきであらう。

結婚は非常に尊重せられた。然し、遺憾な事には、多妻主義に對しては未だ格別の熟慮を拂はれて居無かつた。而して、彼等の間に於て兒童の訓育が最も肝要なる一つの義務と爲された所以は、國民の願望が必ず次代若しくは其の後には實現せらるべき筈との確信があつたからである。然れば、此の邊の事實に徵しても、家庭に關はる近代の文明及び理想が舊約時代の實際に負ふ所の決して尠からぬ事が、一見以て直ちに察知せられると思ふ。

□ 國家と敎會 舊約聖書の讀者は誰しも、家長的家族制度であつた其の昔よりしてソロモン時代の一層擴大せられた王政組織に至るまで、人類社會が當に王又祭司たる父祖に據つて以て作成せられ居るを觀る事であらう。所詮、舊約聖書に於け

る理想的の國家は、父又王者たるエホバの下に在る同胞の邦國なのである。而して斯くの如き國家に在つては、同胞主義といふ此の神聖なる義務を害するやうな不義や壓政は、徹頭徹尾皆邪曲として排斥し去られたのであつた。一體、國家と敎會とを辨別する事は何時でも容易いとは限らぬが、偶々、其の範圍と特性とが全く同一であつた事もあつた。新約聖書に於ては、實に之等兩者の連想が「天國は近づけり」との最初のメシヤ的使命に對して如何にも豐富なる內容を與へて居るのである。（デヴィドソン著「舊約聖書神學」二三五頁以下參照）

八　犧牲　ヘブル民族も亦他の民族の例に洩れず、永い永い過去からの遺業として神に犧牲を献げるといふ事實をば承け繼いで來て居る。蓋し、其の時と處とを問はず、人類歷史の初葉に於ては、之等の禮拜行爲が本來の神聖命令若しくば當然神の嘉納せられる事として制定せられて居つたのである（創四章八節參照）。然しイスラエルの儀式では、全然、神よりの顯然たる指圖の下に發達したものとして、一層明確豐富な意味が籠められて居る。而して、其の犧牲には數種の觀念があつた。卽ち、神との交はり特に和平感恩の象徵として之を献げるのと、神の怒りを宥和して彼れとの交はりに復歸した意味で献ぐるのと、猶一歩を進めて、其の間に此の犧牲が人の罪故の代苦であるとの信念を含めて献ぐるのと、少くとも之等三種の觀念は到底看過し得べくも無かつた。然かも、其の孰れなるにもせよ、斯種の觀念を通じて、深刻なる罪責の意識と痛切なる贖罪の必要とは、遙かに遠く、彼のカルバリの十字架を豫示する儀式として、如何にも宛がらに顯著なるものがあつた。蓋し、舊約の犧牲は禮拜者當面の必要に順應するのであつて、其處には神から離叛した人の罪の如何に醜惡極まるかも示され、延いては、神御自身が救贖又復歸を果される場合には、唯一片の儀式とも閑却せらるべき此の犧牲が、奇しくも自からに其の人の靈性將來の面目如何をも指示し得る程なのである。然ればこそ、ユダヤの基督者は、數百年後の子孫の時代になつても猶、舊約の此の制度をば至極容易に理解し得

た事であつた。

問題と總括

(一) 他の種類とは異つて、律法のみが何故一法典として舊約書中に結集せられて居らぬか。

(二) 出埃及記・利未記・民數紀略及び申命記に見ゆる法制の綱要なば精確に銘記すべきである。「契約の書」とは如何、其の利未記及び申命記との關係を問ふ。

(三) 之等ヘブル律法の道德的又心靈的の意義如何。

(四) 家族教會・國家及び犧牲の諸制度の特徴は何ぞ。且つ、之等のものが近代の諸制度に及ぼす効果は如何。

第四章　イスラエルの豫言者

【壹】舊約全時代の特質

一　舊約本來の傳統たる豫言者

舊新約を概觀した丈けでは豫言も或る特殊の事相のやうに思はれるが、其の實、此の豫言といふ事は本來舊約の全體を通じて殆んど傳統的に現れて居る事相なのである。即ちアブラハムが既に夙くもエホバの豫言者であつた(創二十章七節)では無いか。之に次でモーセ亦豫言者の重なる家系の始めであつて、爾來舊約時代の最後まで、此の特色は殆んど絶たれずに保持せられて居る。蓋し、舊約文學の大部分は其の起源及び特性に於て全然豫言的なので、夫れは當時のユダヤ人達自らにも然かく思惟せられたのであつた。彼の律法書の後を直ちに承けた六冊の歴史書、即ちル

ッ記丈けを除いてヨシュア書より列王紀略下までは、明確に豫言者の活動と其の使命との記錄と言ひ得る。而して、詩篇の小引に當る其の第一二兩篇の如きすら、全卷に亘る豫言的の要素に就て述べて居る位で、其の邊讀者をして思ひ半ばに過ぐる感あらしめるのである。所詮、豫言は舊約聖書に於ける文學上又宗教上の最大要素に外ならぬ。

【二】豫言者の就職準備

一　師弟承傳と聖靈の恩化

斯る豫言者の就職が如何にして準備せられるか。之は如何にも我等の興味を促す問題なのではあるが、遺憾にも聖書中之に就て暗示を與へ得る個所が極めて寥々たるが爲めに、大體は揣摩臆測の外に出でぬ有樣である。通常「豫言者の子弟」と呼ばれる階級若しくは團體は、我等が通常の語義の上から理解して居るやうに今日の

謂ゆる神學校に當るのでは無い。唯、國家的又は宗教的の危機に際して豫言者としての賦與と召命とを蒙つた人々の群を指し示す丈けに過ぎぬ。彼等は本來學校や學派を成すのでは無く、孰れかと言はゞ修道院にも近い團體なのであつて、エホバの禮拜者又使者として、屢々彼等相互の保護激勵の爲めにとて、例へばサムエルやエリシヤの如き大なる指導者の下に集まつたのである。一體、豫言者となる準備として實際判つて居る事は、此の徒弟主義であつて、年長の豫言者が其の事業を繼承すべく若年の子弟を撰擇訓練したのである。即ち、モーセはヨシュアを有し、エリはサムエルを敎へ、エリヤの外套がエリシヤの手に落ちた類ひなのである。更に一層降つては、彼のパウロが其の「靈の子」テモテをば發見敎養した抔も一つの類例であらう。然し、豫言者の準備も之丈けでは足らぬ。爰に於てか、若年の豫言者は時代の道德的又心靈的指導者たり得べく、あらゆる知識的の學才藝能を以て其の當面の課程としたのである。勿論、之等を外にして其の當然の要素が神よりして直

接に傾注内住せしめられる聖靈なる事は今更特に言を費す必要はない。

【三】豫言書の種別

三　傳統の種別法

前後兩期に分つヘブル傳統の種別法がある。卽ち

(イ)前期の豫言書――ヨシユア、士師、サムエル前後書、列王紀略上下。其の內容に基いてヘブル正經(カノン)と明確に斷定せられ居るに徵しても、之等の六冊が眞實に豫言者的たる事は何等の疑ひも無い。

(ロ)後期の豫言書――イザヤ、エレミヤ、エゼキエル並びに十二の小豫言書。猶之等を分つて、イザヤ・エレミヤ及びエゼキエルの大豫言書と、集めて以て類視し得べき十二の小豫言書と爲す事も出來る。

研究の目的にも副ひ得べき一層滿足なる種別法は、舊約歷史の示す所に從ひ、歷史的に時代別を試むる事である。卽ち、

(イ)アッスリヤ時代――イザヤ、ホゼア、アモス、ヨナ、ミカ、ナホム、(恐らくヨエルも)。

(ロ)バビロン時代――更に二小別して、エレミヤ・オバデヤ・ハバクク・ゼバニヤの前追放期と、エゼキエル及び第二イザヤ(第四十―六十六章)の追放期とする。

(ハ)ペルシヤ時代――ハガイ、ゼカリヤ、マラキ。

【四】豫言者の特質

五　豫言者の外的特性

豫言者の職務は、王や祭司等の場合のやうに世襲では無かつた。彼等の就職又は

其の準備に就て、特定の年齢とても別段に無かつた。又、祭司・レビ族及び君民等の差別も無しに、如何なる支族或は階級からでも豫言者が撰ばれて居つた。而して彼等には何も制服とか役宅とかいふべきものも無かつた。夫れ故、結局、何等外部的又職掌上の儀禮で以て、特に其の豫言者たる事を表しては居らなかつたのである。

六　豫言者の內的特性

此の內的特性の方は、前項の外的特性よりも一層興味深く大樣次の諸點が注意せられねばならぬ。即ち、豫言者たるの召命は神御自身よりして下つたのである。豫言者が一般的の使命に接したり乃至は或る特殊事項の衝に當つたりするに先立ち、何等か超自然的の顯現に接するのが其の常であつた（創三章及び賽六章等參照）。然れば豫言者の事業の開端は、自分の蒙つた神來の使命を解說する事にあつた。彼等とても素と時代の子であるから、全然其の起緣を人間界に有する事物に關涉皆無とは言はれぬが、彼等は寧ろ、國家草創の際に於て折角の契約が閑却汚損せられたのに對して、之が復興と遂行とを宣傳すべく派遣せられたのである。元來、豫言者は眼に見ゑぬ眞の神の最も熱誠なる選手として出現したので、從つて其の記錄には有力なる一神的論證が試みられ、彼の安逸極まる儀文主義に反抗して、心靈主義の主張を高唱するのも素より其の所である。斯くして豫言者は危機に瀕せる人民の最も信賴し得べき助言者又友人なので、其の言ふ所亦「刺針の如く賢き言葉」に外ならなかつた。げにアモスも言つて居るやうに「確かに主エホバは」豫言者に未來洞察の能力を與へ、彼等を己が僕として之に神御自身衷情の機密をば打明けられたのである。然は言へ、未來の出來事に就て豫め語るばかりが決して豫言者の能では無い。之は要素に違ひ無いが、到底豫言の總體には當らぬ。要するに、豫言者は精神界の見者（シヤー）なのである。彼等こそは實に舊約中最大の英雄型であつて、身に振り懸つて來る危難等は一向物ともせず、自家の利得には飽くまで恬淡たる眞理のチャンピオンと言ふも過當であるまい。

七　僞りの豫言者

豫言者の職務が如何に眞率又有力であつたかといふ其の一證は、ヘブル史上種々の場合に僞豫言者の起つた事である。就中、よく知られて居るのは、スリヤ遠征に先立ちて彼のアハブ王が僞豫言達と淺ましい協商を遂げた事である（王上二十二章）。他の著しき例はエレミヤ時代の事であつて、彼は其の爲に第二十三章全部を割愛して居る。エゼキエル亦彼等を手酷しく取扱つた事は、其の第十三章に記されて居る通りである。

八　豫言者の名稱と稱號

ヘブル語の原書に於て、豫言者の稱號として通常用ひられた言葉に三種ある。其の第一は Ro'eh——『見る』といふ動詞の分詞的轉用であつて、見る者又は熟視する者との意味である。其動詞は普通に物質的幻象に用ひられるのであるが、其の分詞體では屢々豫言者の心靈現象にも適用せられて居る。サムエルの場合に、よく此の語が用られてゐる。次には Choseh——之は前のと同樣に『見る者』と譯せられては居るが、特に神秘的失神的の幻象に接した者が、具體的又物質的では無しに、心的又靈的に見る事の動詞として用ひられたのである。而して最後には Nabhi——通常『豫言者』と譯せられ、哀情や言表の熱烈なる餘りに人の心の涌き返る事を意味して居る。歴代史略上の二十九章二十九節には、恰度之等三者が並用せられ、「Ro'eh サムエル、Nabhi ナタン、Choseh ガド」云々と見えて居る。之等三人物の性格等から推しても、自から三用語の特色の程も窺はれやう。猶此外に、『主の使』『神の僕』『神の友』又特に『神の人』など數種の言葉が豫言者の稱號として用ひられて居るのである。

【五】豫言者の略傳

九　アツスリヤ時代の豫言者

(一)**イザヤ**　はユダの一豫言者で、其の家はエルサレムに在つた。彼は紀元前七四一年頃、恰度ウジヤ王の治世に於て特に其の職務に當り、之を終へたのは同六九七年マナセ王の惡政の初葉よりも早くは無かつた。イザヤの父がアモツであつた事彼には妻子のあつた事、並びにウジヤ王の逝ける年に特殊の召命を蒙つた事等の以外には、何も彼れ自身の私的生活に就て知られて居らぬ。イザヤ書は格別言表の美とか修辭の富とか、又は靈的幻象の强度及び範圍等に於て卓越せる譯では無い。寧ろ彼は、雄辯以て一代の不義壓政に抗し、社會の腐敗亦驚くべきに際して一意眞理と公平との爲めに獅子吼したのである。蓋し、彼の主題は實に「正義」であつた。本書が特に他の舊約書の孰れにも優つて新約の到る處に引用せられて居るのは、偏にかの暗黑艱難の時代に當つて此の豫言者イザヤが神に在る希望を懷いて遠き將來の祝福を凝視し、「イムマヌエル」又は「エホバの僕」の相に於て、親しくエホバの救の幻を仰ぎ得たからである。故に、イザヤ書は舊約書中、最も個人的にメシヤが

描き出された豫言書なのである。

序に斷つて置くが、同書第四十章以下は此の歷史的人物イザヤ自身の作とは思はれぬ論據があるので、普通に第二イザヤとして其の第三十九章までと區別せられる。其の論據の何たるかは、謂ゆる第二イザヤの項に於て自から判るであらう。

(二)**ホゼア**　はイザヤと略ぼ同時代ではあるが、其の出身地も其の豫言も共に北方イスラエル王國に關はり、恐らく後のガリラヤを以て其の舞臺を爲して居つたらしい。由來ホゼア書も前後兩部に分たれるのであつて、最初の三章はヤラベアム第二世（七四九年歿）の治世に當り、紀元前七五〇年よりも早く書かれ、殘り十一章は、其の幾年かの後に國亂れて王朝急に變り、イスラエル王國自體も滅亡の危機に瀕した其の折柄に公けに爲されたのである。而して、其の初めの三章は、イスラエルが永く親しく祝福せられたエホバに對して、如何にも不忠不貞であつた次第を叙し、之が例證としてホゼア自身の愛せる其の淫行の妻の事を引いて居る。要するに

其の全卷に慈愛漲り、自然界及び日常生活上の美はしき例話にも充され、情け濃やかにして然かも其の功を誇らぬエホバの愛を以て之が基調として居る。若し夫れ、此のガリラヤの說敎者の言說如何にも暗示に富むは、約八世紀を隔てゝ同じガリラヤの民衆に敎へ且つ訴へしイエス其の人の俤をも偲ばしむるものがある。

(三)**アモス**　はユダの出身ではあるが、北王國の爲めに敢て豫言した一人である。彼はイザヤやホゼア等と略ぼ同時代の人であつて、イザヤよりは少し早く、恰度ホゼアの初年位を中心として居る。此のアモスの使命は、「地震の二年前」(此の地震は紀元前七五〇年頃と察せらる)に一度イスラエルを訪れた折に宣べられた。而してアモス書の主題は當時イスラエル王國内に、横行して居つた不義壓制に關はり、正義の神エホバは到底之を不問に附し難く、聽て審判し笞を加へられるであらうといふのである。

(四)**ヨエル**　は、舊約の編者に依つてアッスリヤ時代の豫言者として配せられては居るが、其の書中に毫頭時日の記載無く、從つて諸說紛々たるものがある。ヨエル書は國難と蝗害とに關はり、共に外寇の如字的若しくは象徵的の記錄と見做されて居る。然ればこそ、豫言者ヨエルは悔改斷食及び祈禱を切に要請したのである。而して後部に於て始めて、來るべき靈的振起並びに再生を說いたのであつて、此の邊の語句は遙かに時を隔てゝ彼の使徒ペテロが聖靈降臨のペンテコステに於て引用して居る。

本書は、其年代に關して二說がある。即ち、古來の傳說通りに斯く之をアッスリヤ時代に配するのと、一層深く之が內容を點檢してヘブル人が囚虜から釋放復歸した後ちの時代に配するのとである。後說の論據は、本書の用語が他のアッスリヤ時代の豫言者達の夫れと異り却て釋放後の文學樣式を備へて居る事や、スリヤ又はアッスリヤ等に就ては全然沈默を守りながら寧ろエドムやエジプトとの交涉密接なる事其他に存するので、然すれば、本書の如きは遙かに約百有餘年を隔てた後のペル

シヤ時代に近き豫言文學と爲さねばならぬ事とならう。

(五)ヨナ　は、北王國の全盛時代たるヤラベアム第二世の治世（王下十四章二十五節參照）に際しての豫言者であつた。其の活動も亦從つて恰度紀元前七七〇年頃アモスやホゼアが活躍した數年前に當つて居る。ヨナ書に於ては、最早其の撰民たると異邦人たるとに論無く、聽てはエホバに依つて世界的に統御せらるべき事に就て敎へ、ニネベに對する悔改の宣敎を肯はなかつたヨナ自身の體驗に徵して、イスラエルの如何にも狹量なる事を難詰するのであつた。

殊更豫言書のみとは限らぬが、舊約中には間々其の書に冠した人名との交渉密度案外に薄くは無いかと疑はれるのがある。本書の如きも實に其の一つである。成程豫言者ヨナは紀元前第八世紀の前半に活動したと思はれるが、退いてヨナ書の內容を閲みする時、書中のヨナは同名異人では無いかと人をして危ぶましめる。即ち、大都ニネベは漸く紀元前七〇六年に至つて滅び、本書二章に其處此處と取捨引用せられ居る詩篇の幾つかは紀元第八世紀後の作なので、特に書中の語句に於てバビロン四虜以前には不知案內であつたものを多く含んで居る。之等の理由で、本書の著作は實際ヨナの生存した時代よりも三百年位後であつたと察せられて來る。果して然らば、ヨナ書記者は昔の豫言者ヨナの名を借りて、以て寓意の籠る此の一篇を成したのであらう。

(六)ミカ　は、イザヤと同時代で然かも幾分年少なるユダの一豫言者であつた。然かし、其の文體は全然イザヤの夫れとは異つて居る。卽ち、此のミカは、彼の王宮に出入したイザヤ等とは違ひ、全くの田舍人であつて、職掌上農耕牧畜の生活に事例を借り來り、都會人イザヤが雅致ある辭句を用ひたのと比して如何にも好反襯なのである。然あれ、ミカも亦イザヤの如くに、力强く個人的メシヤの希望を宣べて居る。其の間には緣り無くもベツレヘムに嬰兒たる救主を求め來つた博士達に關はる豫言も含まれてゐるのである。

(七)ナホム　はアッスリヤ時代の末期に近く豫言したので、ニネベの陷落近づける事を明確に描寫して居る。彼は多分アッスリヤに生存して豫言したと覺ばしく、其の兩親に伴はれて囚虜たりしを察せられるのである。

(八)オバデヤ　此の名を冠する豫言者は僅か一章に過ぎぬが、其の使命とする所は、外難内訌に對して最早何等の援け無きユダを壓したるエドムに對する神の審判なのであつた。エドムは終に滅され、シオンは光榮類ひも無き未來の約束に依つて慰められるのである。

十　バビロン時代の豫言者

(一)エレミヤ　は祭司であつて、エルサレム郊外のアナタテの出身と傳へられて居る。彼は、紀元前六二七年卽ちヨアシ王の第十三年から豫言し始め、エルサレム滅亡後卽ち紀元前五八五年の頃まで其の衝に當り、避難するユダ王國の民衆と共にエジプトに下つたのであつた。其の書は實に多忙勇敢なる豫言者の理想的記錄なので、豐富なる譬喩と熱情の籠れる雄辯とを以て、同情呵責交々なる罪に對する脅威と悔改に就ての優しくも情け深き辯疏とが、感激思慕の言表の間に其の當面の使命として語り出でられて居る。

(二)エゼキエル　はエレミヤよりも稍年若く、從つて其の感化を蒙る事亦多大であつて、紀元前五九七年、彼のネブカデネザル王がエルサレムを攻圍した時に、遠くバビロンに追放せられた一人なのである。エルサレムの陷落に先立ち、彼れ起つてバビロンに來つた同胞の如何にも淺ましい罪惡をば難じ、明らかに其の熱愛せる聖都の陷落をも豫め告げたのであつた。而して其の愈々陷落し果つるや、彼は轉じて究竟の赦免と復興とを彼等に說き、聽ては恢復せちるべき神殿と之が奉仕とに就ては幾多の象徵とを以て示す所があつた。想ふに、異境にさすらうて具さに亡國の嘆に悶えつゝあつたイスラエルは、エゼキエルの靈眼透徹せる邊りに眞個の福音を握り得た事であらう。

(三)**ハバククク**　はヨアシ王の時代に豫言したのであつて、彼は國民腐敗の現狀を詰責して其の終にバビロン人に依つて懲罰せらるべき事を前言して居る。斯くて、其のハバククク書は美はしき信仰の詩を以て結末を告ぐるのである。彼の新約に於て屢々用ひられる「義人は信仰に由りて生くべし」との一句は、實に此の豫言者が喝破した所である。

(四)**ゼパニヤ**　亦ヨシア王の時代に屬し、其の使命は當代人民の廢德壓制と抗爭する事であつた。而して、彼等イスラエルを始めとして萬國民皆一樣に、聽ては審判せられるのである。然し、シオンの民は終に囚虜の羈絆を脱して歡呼の裡に歸來し得るであらう。

(五)**第二イザヤ**　卽ちイザヤ書第四十章以下は、本書の前半中の或る個所等と共に、通常バビロン囚虜の殆んど末期に屬するものと認められて居る。其の證據には其處に却て此の囚虜を誘るやうな口吻も見える。然は言へ、斯種の囚虜觀と雖も決して根本的なるメシヤ的解說をば兎や角と左右するもので無い、唯歷史的局面一變化を齎らしたのみである。

イザヤ書第卅九章までに屢々繰返された語句が皆其の第四十章以下に於て少しも用ひられて居らぬのみか、却て此の第二イザヤには豫言者イザヤ自身が一向用ひなかつた語句が現れて來る。而して此の部分の所載に徵すれば、エルサレムの都は既に荒れ廢れて其の民の大部分は既に囚はれてバビロンに在るので、自から紀元前五八七年エルサレム滅亡の後ちを承けての作と領かれ、兎に角、第二イザヤの作者が彼のイザヤとは全く時代を異にする別人なる事も判つて來る。加之其の中にはペルシヤ王クロの名は見えて居るが同王のバビロン攻略の事には及んで居らぬ所よりして一層明らかに其の著作の時代を想察せしむるのである。若し夫れ、同じイザヤ書の第五十六章以下は更に後代の作と認められ、第三イザヤの名目さへ附せられる程なのであるが、其の邊の解說に至つては餘りに學究的になる懸念もあるから、姑らく

措いて置かう。

十一　ペルシヤ時代の豫言者

(一)**ハガイ**は、ユダに歸來した其の同胞が只管各自の運命開拓に忙しくして、弊の趨く所終に、クロ王が彼等をバレステナに送り歸した當面の目的たる神聖義務に不忠實なる有樣を眼のあたりに觀、ダリヨス大王の第二年即ち紀元前五二一年に此の豫言者は神殿建築の爲めにこそ歸來すべきであつたとイスラエルを激勵したのである。其の結果として、五一六年には神殿も竣工したのであつた。

(二)**ゼカリヤ**の主題は、ハガイと略ぼ同樣であつて、彼と同じ年から其の豫言を始めたのである。然し、ゼカリヤ書の方は一層文飾にも富み、默示文學の形式を採つたものであつた。

(三)**マラキ**は最後の豫言者であつて、紀元前四四四年頃に彼のエズラやネヘミヤの下に第二回の復歸が行はれた當時に豫言した。彼は屢ネヘミヤにも指摘されてあるやうに當時の宗教上の冷淡と道德上の害惡とに反對して敎說を試みたのである。後年マコ傳記者は、此のマラキの豫言的約束を以て其の福音を說き初めた。曰く「見よ、我れ汝の面の前に我が使者(「使者」のヘブル語はマラキ)を送る」と。爰に舊新約の連鎖が見出されるのである。

問題と總括

(一)舊約聖書に於ける特殊の事象たる豫言の意義如何。其の歷史上の凡ての時代を通じて見出される實例を擧げよ。

(二)豫言者は、其の就職に先立ち、如何やうな準備を爲したのであるか。

(三)研究の便宜上、豫言書は如何やうに分類せられるか。歷史上の時期に基ける種別は、特に憶え置く必要がある。

(四)豫言者獨特の要點如何。

(五)豫言者に就ての稱號を擧げよ、又豫言の意義を問ふ。

(六)ヘブル民族史上に於ける各豫言者の地位を學び、其の各書の梗概及び特色を會得せよ。

第五章　イスラエルの詩人

一　ヘブル詩歌の形式

欽定英譯では、散文も詩歌も書き下しの同一形式で刷出せられて居るが、改正英譯に於ては、其の詩歌の部分は讀者が一見以て詩歌と判るやうになつて居る。曾にヨブ記・詩篇・箴言・雅歌及び哀歌の如き全卷皆詩歌なるものゝみならず、其の子等に關はる豫言（創四十九章）モーセの歌（申三十二章）及びハンナの讃歌（母前二章一―十節）の如き、歴史書中に散見せられる詩歌に至るまで、總て詩歌の形式を以て記されて居る。蓋し、之等詩歌共通の樣式は、ヘブル詩形の特徴たる並叙法を示さうと試みたのである。抑も詩歌なるものは、其の想像的具體的の思想或は彼の鮮躍高擧の措辭に依つても散文と辨別せられるが、畢竟、主として韻律の用否如何に據るのであると思ふ。所が、此のヘブル詩に於ては、或る特殊偶然なる場合

を除いては韻律といふものが無く、搗てゝ、嚴重な意味では全然詩律を缺いて居るので、唯其の間、常に一種韻律的なる潮が漲つて居て、長さ略ぼ等しき兩句が相俟つて助け合ひ、或る行の感情亦次の行に依つて反響せられるか、完成せられるか、又は應酬せられて居るかに過ぎぬのである。並叙法に於ては、其の原則的の四相が劃然認められる。即ち、

（一）類語並叙法――兩句がそれ〴〵異れる言葉もて同一觀念を表現せるもの、例へば、

「われつねにエホバを祝ひまつらん、
　その頌詞はわが口にたえじ」―詩三十四章一節―

（二）對照的並叙法――兩句が互に反視的なるもの、例へば、

「柔和かなる答は憤恨をとゞめ、
　厲しき言は怒りを激す」―箴十五章一節―

(三)總合的並叙法(シンセチック)——第二句が、何等思想の方嚮を變ずる事無しに、第一句の觀念をば進歩的に表現するもの、例へば

「エホバの法(のり)はまたくして靈魂(たましい)をいきかへらしめ、
エホバの證詞はかたくして愚かなる者を智からしむ」—詩十九章七節—

(四)構成的並叙法(コンストラクティーブ)——第二句が第一句の思想を進めて一層之を完成するもの、例へば、

「遠き國より來る好き消息(おとづれ)は、
渴きたる人に於ける冷かなる水の如し」—箴二十五章二十五節—

此の外にも猶幾多の並行句の混合體もあるが、敢て其の逐一を爰に擧ぐる程の必要もあるまい。上記四相の例から推して、此の並叙法がヘブル詩の要素なる事が知られ、從つて之がそれ〴〵の意味を決定する事ともなり、又之を記憶する上にも大なる助けとなるのである。

二　ヘブル初葉の抒情詩

ヘブル詩は、其の殆んど總てが抒情詩であつて、唯一の叙事詩すらも無ければ、又世に謂ゆる劇詩の類ひをさへ有して居らぬ。彼のヨブ記や雅歌にしても、唯單に雅戯曲的ともいふべき形式を備へて居るに過ぎぬ。而して之等の抒情詩の中で最も舊いものと知られて居るのは、ラメクの劍の歌(創四章二十三節)の如きである。井戸の歌(民二十一章十七—十八節)やサウル父子に對するダビデの挽歌(母後一章十九—二十七節)等と同樣に、之は一片の民俗詩歌たるに過ぎぬのであるが斯種特殊の例外を除けば、今日保存せられて居るヘブル抒情詩は全然宗教性を帶びたものゝなのである。蓋し、舊約書中、比較的に舊い價値最も多き抒情詩の雙璧は實に、イスラエル最古の國民的讃歌ともいふべき紅海に於けるモーセの凱歌即ち救はれた國民の信神歌(出十五章)と其の熱情に於て如何なる國語のいと氣高い戰爭短詩の間に伍しても毫頭遜色を認められぬ彼のデボラの鼓舞的戰爭歌咏(士五章)

とである。猶其の外にも、既に夙くも、抒情詩發達の高處を擧するやうな一層印象深き偉大なる詩篇が現れて居る。――之れ即ち「神の人モーセの祈り」と言はれて居る崇高悲壯の詩篇第九十であつて、其の不朽の價値又不磨の勢力は、實際之が基督教國に於けるあらゆる葬儀のプログラムに其の地歩を占めて居る事に徵しても領かれるであらう。

三　ダビデ

然し、何と言つても、抒情詩の黄金時代はダビデに存すると思ふ。蓋し、天性既に音樂者又詩人であつて、次ぎ〳〵に牧童・伶人・王の伴侶・神軍の選手・人民の偶像・追放者・亡命の客・武士・王者・罪人・艱める者又痛悔者であつて、末終に聖徒であり得た「其の生涯の多面多樣なる轉變浮沈は、斯人の體驗の上に匹儔も無き深刻味と種々相とを與へ」依つて以て一際立ち優つて「イスラエルの善き歌人」(母後二十三章一節)たるべき資格を彼に備へしめたのであつた。然あれ、其の天才と環境とのみでは、また到底彼が歌ひ出でた程の詩歌を產出せしむる事は出來無かつたのである。現に、彼は其の臨終に於て此の邊の消息に觸れた自白を試みて居る。曰く、

「エホバの靈、わが中にありて言ひ給ふ。
其の諭言、我が舌にあり」―母後二十三章二節―

と。果然、類ひ稀れなる生涯の調整に依つて訓練せられ、且つは活動世界にも召し出された此の無比の自然的天才も宗教詩の模範典型たるべき曲調を吐露するに先立ちて、特に超自然的なる聖靈のインスピレーションに依つて促され又燃されねばならなかつたのである。

四　詩　篇

編輯せられた百五十の詩篇の中、七十三篇はダビデ、十二篇はアサフ、十二篇はコラの子等、二篇はソロモン、一篇はモーセと記名せられ、其の他の五十篇は讀み人知らずと爲されて居る。

改正英譯も亦ヘブル原本同樣に一—四十一・四十二—七十二・七三—八十九・九十—百六・百七—百五十の五部に分たれて居る。之等は最初それ〴〵に別冊の歌集に編まれたらしく、神殿の禮拜用にとて時を隔てゝ集められたものと察せられる。而して、各冊の終りには頌榮ともいふべき言葉が記されて居る。

之を要するに、詩篇は「其の創造者の掌裡に握られた人間衷情の全幅的なる音樂」を含蓄するのであつて、偶々以て夫れは人間の「あらゆる精神部分の解剖」にも當るのである。蓋し、此の詩中に現れて來る人ごゝろは決して無邪氣では無い、——此の場合、夫れは我等に何等の價値をも有せぬ——實に罪惡の意識如何にも深刻であつて、專念、廉耻痛悔以て神との人格的靈交を更新せんとの願望に喘ぐのであつた。斯くして、最も高貴なる天才の靈的情熱を表現し、又無學なる田夫野人の渴仰をも表現して居る。然ればこそ、爰に用ひられて居る片言隻語亦能く咀嚼せられて終には諸國民日常生活の一部をも成すに至つたのである。即ち、古今東西の基督者が其の信仰を吐露する時、有意無意の間に如何ばかり詩篇の語句を適用しつゝあるか、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。所詮、此の詩篇を措いて、他の如何なる書冊と雖も、世界の宗教的生命に斯くまで偉大なる感化を及ぼし得たものとてはあるまい。

因みに、詩篇の通俗なる註釋書で最良なるは「講解者の聖書（エキスポジターズ・バイブル）」の中にあるアレキサンダー・マクラレンの著述である。

五　箴　言

詩篇が舊約聖書に於ける抒情詩の一大結集であるのと好一對に、箴言は理知的又教訓的詩歌の一大結集なのである。即ち、詩篇は我等に如何に禮拜べすきかを教へ、箴言は如何に生活すべきかを教へて居る。

作者 本書の標題にソロモンの名の用ひられて居る事は、何も彼が其の全體の作者たる事を示すには當らぬ。其の附加の大部分が、ソロモン後約三百年即ちヒゼキ

ヤ時代の學者の手に成つた事をば、本書自ら（二十五章一節）が告げて居るでは無いか。而して猶一層後代の作者の箴言も附け加へられたと見え、彼等の名が幾つも認められて居るのである（三十章一節・三十一章一節等參照）。

内容 近代語の見解に從へば、箴言とは内容多趣なる事柄をば幾分譏刺的で且つ辛辣味のある言辭に括約した簡潔遒勁なる金言の謂なのである。夫れ故、之等箴言の教育的價値如何にも顯著なる事は、一讀直ちに明白なのであつて、人類に對する神の大教科書ともいふべき聖書に於ては、當然斯種の完備せる教育的文學書を挿まざるを得なかつた。即ち、此の舊約の箴言程に最も豊富多様なる金言集は、他の如何なる文學に於ても蒐集せられて居らぬのである。蓋し之等の箴言は人間の生活及び其の活動の全豹に觸れて、純潔・節制・着實・執着・深謀遠慮及び機宜を得た說話振り等、其の他の諸德をも共々に丁寧反復教示する所がある。本書は實に、道德教本であり、實際倫理の教科書である。

然し之等の金言は啻に細心にして處世的なるのみでは無い。其の基調は信神にある。其の綜合的原則は知慧――人生の眞法則――であつて、知慧の始めは主を畏れる事即ち敬虔なる信仰である。

然は言へ、本書は唯單に斯樣なる斷片的の金言のみで以て成り立つて居るのでは無い。其の肝要な部分は、例へば一章の八九兩節の如くに、極めて短簡ではあるが主題を高調して宛然一個の奬勵的說話を成して居る程なのである。

「ケムブリッヂ聖書（バイブル）」中のテイ・テイ・ペローンの註釋や、「講解者の聖書（エキスポジターズ・バイブル）」中のアル・エフ・ホルトンの講解等は、本書の研究には甚だ有効であらう。

六　ヨブ記

英國の詩聖テニソンは、此のヨブ記をば「古今を通じての最大詩歌である」と宣べて居る。

本書の主題は、實に義者の試練なのである。

ヨブの友人達は、苦難が常に惡行の結果たる事を論じ、以てヨブの誇大的苦惱も亦畢竟何等か其の顯著なる兇行罪惡に據ると斷ずるのであるが、ヨブは憤激の餘りに此の論法を排斥するのであつた。素より、ヨブ自身と雖も強ち己れに一點の罪無き事を認められやうと要請するのでは無いが、敢て其の異常なる苦惱に値する程なる極惡非道の罪をば犯さなかつた事は熟知して居たのである。（因みに、本書記者が其の緒言に於て說破したやうな事、即ちヨブの苦難が其の正義の試練であつたといふ事を、ヨブを始め其の友人達の毫末も與かり知らぬ所であつた點は、決して閑却せらるべきでは無い）。爰に於てか、ヨブは混惑悲痛の餘りに神をば公義ならずとして難ずるにも至り、危うくも信仰放棄の危機に瀕したのであつたが、然し、全然其の神に於ける信仰を喪失するにも及ばなかつた。彼れの友人達は遂に沈默せしめられたのであつたが、猶其處には未だ不可解の謎が貽されて居つたのである。

エリフの調停　年若き一人の傍觀者は、ヨブの三友人の態度には一樣に不滿であつた。然かも、彼は、苦難偏に罪惡に對する刑罰に外ならずと觀じて懊惱遣る瀨無く論辯しつゝあつたヨブを顧み、苦難は啻に懲治的なるのみならず、實に治療的に訓育上の價値ありと敎へて、其の議論に新たなる光明を投じ得た事であつた。（三十二章―三十七章參照）

エホバ神の解說　エホバ神と雖も、ヨブの危難即ち義人苦惱の秘義に就ては何等釋明する所も無かつた。然し、神は一層深甚なる神觀を促して以て、單にヨブの思想上又生活上のあらゆる水路を打拓かれたのである。斯くて神觀衷に充溢して其の溯の高鳴るや、混惑も早や何處へか消え失せて、宛かも干潮に見えた醜き海面の今は滿ふる水に蔽はれ果てゝ定かに夫れと判らぬ巖にも似て居ると思ふ。蓋し之が即ち嵐の最中に神が自らをヨブに顯はし給ふた其意義なのである。神は爰にヨブに近く彼れ自身と其の充ち溢れたる榮光とを示されたのであつて、其の爲めヨブの心意には曾て未驗の神觀が體得せられたのであつた。――「今我が眼汝を見奉れり」（四十

二章六節)。神の斯る顯現に接しては、ヨブたる者の衷情啻に言ひ知れぬ歡喜に戰(おの)くのみかは、神に關する己が過去の思想言動に畏縮して、只管薩と灰との裡に悔改むるの外は無いのであつた。(三十八章—四十二章六節)

ヨブ記の歸結は、類ひ無き宏大さと壯嚴さとの二相を齎らして居る。即ち、創造の不可思議と其の創造者の偉大とを描いて、唯神の御手の業とのみ速斷して居つた自然界にも猶自らの解決し難き幾多の神秘の存する事を示され、ましてや幽玄極まり無き道德界の秘義未だ俄かに判じ難きを知らぬ事とはいへ、小賢(こさ)かしげに神の攝理如何抔と輕々に辯ずる事のおこがましさを指摘せられ、且つは此の宇宙が啻に神の勢力のみならず、其の知慧と愛とに於て信賴を要請するものなる事を敎へられて居るのである。

七　雅歌

雅歌は英譯で「歌中の歌(ソング・オブ・ソングス)」となつて居る。「聖中の聖(ホリイ・オブ・ホリイス)」や「虛無中の虛無(ヴアニティ・オブ・ヴアニティス)」抔と

同樣、此の標題にも無類なる力が籠つて居つて、一語既に此の歌が特別に卓越したものなる事を諷し得て餘りがある。即ち之は眞に妙(たへ)にも美はしい一篇の牧歌なのであるが、其の解釋に至つては中々に困難なのである。中には、ソロモンとシユラム人とが基督と其の敎會とを代表して居るものゝやうに、寓意的の作として取扱ふ人人もあるが、斯樣な見解に對する批難は、彼の箴言其の他に於けるが如く、逐一の寓意又は譬喩の間に組織的の目算ある(詩八十章九—十七、結十七章三—十節、士九章七—二十節等參照)に非ずして、雅歌の中には何等夫れらしき暗示が見當らぬといふ事なのである。

他の人々はまた、全然其の邊とは交渉の無い俗間の婚筵歌謠の一結集たるに過ぎぬといふのであるが、然し、此の詩歌全體は渾然繼承せられた一篇の劇詩たるの印象を貼(か)すのである。搗てゝ、若し本書が唯一片の通俗戀歌の結集たるに止らば、其處には毫末も倫理的動機とも言ふべきものを含まぬ事にもなるであらう。果して然

ちば、斯種の詩歌が何故に神聖なる正經中に其の地歩を占めて居るのであるか。其の邊の消息さへ不可解になつて來る。

仍て最良の見解は、之を以てあらゆる誘惑にも打克てる貞淑なる愛の勝利を叙述したものと觀るにあらう。即ち、葡萄園の園守であつて、エスドラ野のシュラムの寡婦を母親とした卑賤な村娘が、身分相應で然かも其の愛を献ぐる價値もある一牧童と婚約して居つたのに、偶々ソロモン王が供人數多引き具しての春の行幸に、彼の女の葡萄園を過ぎ、其の世の常ならぬ美しさに心奪はれて、兎も角もと之を其の行宮に伴ひ、女官達の助けに依つて彼女の愛を贏ち得て以て王宮の閨房に伴はんと勸めたが――然し、總ては皆無益であつた。彼の女は、其の折柄不在であつた愛人に對する讃辭に依つて、立身出世ともいふべき其の道を遮り阻め、たゞ一心に己が戀人なる牧童に憧れるのみか、夜の臥床にさへ夢み、反復拂ひ退け難き王者の追從をも者の數とせず、終には其の美しさにも劣らぬ彼の女の純潔さと牢乎たる心とを看破して、さすがのソロモンも全然此の村娘を斷念したのであつた。爰に於てか、彼の女は其の愛人と相携へ、嬉々として已が家郷に歸るのであるが、此の詩歌の終末に至つて、彼の女は愛が神より生れたエホバの炎なる事を宣べ、彼の「富貴や權勢もて購ひ得べくもあらぬ純眞本然なる情愛の卓越せる」次第をば白熱的の言辭もて喝破するのであつた。

勿論、此の見解は、先づソロモンの筆ならずとも本書を觀て思はせられる事であつて、ソロモン云々の記名も所詮、新約書簡の夫れの如く、後年に及んでさる人が何等精確なる權據としても無しに加筆したものと思惟せられて居るのである。

夫れは兎も角、斯く解してこそ本書倫理上の目的も頗る明白である。蓋し、ソロモンはイスラエルに於ける大の多妻主義者であつて、「彼は七百の妻妃と三百の嬖妾とを擁して居つたのである」。而して、之は、彼が不純潔なる儀式を以て偶像を禮拜する一千人の婦人を其の後宮に入れた後の事であつて、當時エルサレムの都に行

はれて居た淫風蕩事に就ては我等之を箴言に於て讀み得るのである。宮廷に在つた之等異教婦人の群が、街頭に於ける他の幾千人かの先驅者となつてゐた事であらう。併し機方に熟して、今や多妻主義が難詰せられ、一夫一妻主義なる神の理想が高擧提唱せらるべき場合なのであつたに相違無い。此の見地よりして、我等が正經中に雅歌を有する事は寧ろ理の當然と言はねばならぬ。鐵は其の熱したる時に鍛へねばならぬ。時宛かも王者の範を以てして一夫多妻主義が天下に横行濶歩せるに際し、此の不義廢德に對して一大鐵槌を打下すべく絶好の機會では無いか。若し夫れ、反一夫一妻主義者の役割をば當のソロモン王に演ぜしむるに至つては何等の皮肉ぞ。要するに、此の雅歌に於て多妻主義難詰せられて、德行の讃仰已み難き無瑕の詩篇示され、偏に神命を畏みて一男必ず一女を娶るべき性の道德が唱道せられて居る。洋の東西に依つて好尙や性向抔には多少の相違あれ「如何にも嚴肅なる試練に出會つた眞の婦人が有德不易なる情愛の稱讃に値する」點に於ては何等の徑庭とてもあるまい。然ればこそ、現代に於ても靑少年以上の讀者に對しては本書の如きは如何にも高き敎授價値を有するのであつて、就中、比較的に譯語適確用意亦周到なる改正英譯に於て殊に其の然るを觀るのである。

「ケムブリッヂ聖書（バイブル）」中のエ●ハアバアや「講解者の聖書（エヤスポジターズ・バイブル）」中のダブリユ●エフ●アデニイ抔の註解が、本書研究上の好資料であらう。

問題

(一)舊約詩歌の形式上の特徵如何、並叙法の四相の名稱及び其の意義を問ふ。聖書研究者に對しての、此の並叙法の特殊價値は何であるか。

(二)如何なる種類の詩歌が舊約書中に見出されるか。其の總てが宗敎的であるか。異常の力と美との籠つて居るヘブル初葉の三抒情詩を擧げよ。

(三)ヘブル抒情詩をば其の盛時に導き得た人物の性向、才能及び訓育に就て述べよ。詩篇に對して寄與する所あつた作者の名を列擧せよ。

(四)詩篇結集の次第と其の五大別及びそれ〴〵の終末に於ける特徵如何。又當初斯く五部に結集せられた

其の目的を問ふ。

(五)詩篇は世界の宗教生活に對して如何程の大貢獻を爲し得たか。各自が非常に秀逸と思惟する詩篇中の十種を列擧せよ。

(六)舊約書中、最も多く教訓詩を含む書冊は何か。之に關聯せる標題二三を摘示せよ。夫れ等の教訓は果して純粹に用意周到であるか。其の基調は如何。

(七)ヨブ記の文學的地位如何、其の記述の顚末を問ふ、又其の主體は何であるか。ヨブ記の內容展開の次第を問ふ。ヨブの友人達及びエリフの見解を叙述せよ。神は最後に、此問題を如何に解決せられたか。

(八)現時一般に承認せられる見解に徵して、雅歌の主題を問ふ。其の主題は果して「神の書」の中にあるに適應して居るか。雅歌の主題がその當時に特に適應し、又現時にも甚だ適應して居る理由如何。

第六章　舊約聖書と初等科及び幼稚科

一　舊約聖書と兒童

過去――將來も亦同樣であらう――に公けに爲された如何なる書物と雖も、此の舊約聖書程に兒童に對して訴ふる所、直截有効で且つ興味の深いものとてはあるまい。蓋し、舊約の物語と其の文學とは如何にも能く兒童に適應し、從つて其の敎師には豐饒極まる敎育の領野を提供し得られる。

其の大部分が最も幼稚なる國語で書かれて居るから、兒童は其の間に用ひられて居る辭句に親しみも湧いて來る。殊に、其の文章は到る處皆簡明ならざるは無く、原文に於ては複文抔は殆んど度外視されてゐるやうな觀がある。若し夫れ、言辭及事實の反覆に至つては實に其の一特徵なのであつて、現にイザヤの如きは、幼稚の兒童に敎ふる適法として「誡命(いましめ)にいましめを加へ、誡命にいましめを加へ、度(のり)にのり

を加へ、度にのりを加へ、此にもすこしく、彼にもすこしく」（廿八章九―十三節參照）教へよとさへ言つて居る。また、兒童の日常生活に用ふる語句を以て眞理を説明するやうに、細心の注意が拂はれて居るやうな心地のするのは、兒童の師傅として舊約聖書を讀む者の均しく感得する所であらう。

二　兒童のお話好き

由來、聖書は家庭に就て多大の思想が費され、且つ之を己が世界とせる子女に對して其の全卷が此上も無き注意を拂うて居る事は、決して偶然には非ずして實に攝理的なのである。即ち、特に舊約の方は大部分が宛然兒童の年代記とも言ひ得べく、さも繪畫的に描き出されたイサク・エサウ・ヤコブさてはヨセフの少年時代や家庭生活など、一つとして如何なる兒童にも了解の出來ぬやうなのは無い。

即ち後年偉大の人物となつたモーセにしても、嘗て一たびは聊かの扶掖だにあるまじく見えた程の危機に瀕せる嬰兒なのであつた。聽ては相踵いで起る豫言者の先達たるべきサムエルにしても、其の年少に際して不思議にも神が自らを彼に顯された物語故に有名なのであつた。また彼のダビデの事にしても、其の少年時代の物語は、之を聽く程の兒童が皆魅惑せられるやう筆致を以て叙述せられ、其の長じて世に出づるや、萬人が萬人何れも憧れて己まぬやうな忠實・眞情・勇氣又信仰を把持するに至つた其の一伍一什、其の聽かせ方讀ませ方次第では兒童の胸に躍らせ得るのであつた。將た又、異境に寂しく誘惑の巷に在つた少年ダビデにしても、眞醇無垢の哀情を傾けて如何なる幼な心にも肝膽相照らす所あるべき敏捷さと同情の念とが見出されるのであつた。斯く書き始むれば到底枚擧に遑も無い程なので、之等の英雄は皆、啻に成人して後の英雄としてのみならず、氣高くも神をば畏れた兒童期の小英雄として認めらるべきである。

三　舊約物語と幼稚科

斯くまでに話材豐富な舊約聖書の事であるから、其の幼稚科兒童の爲めに如何に

も活き〳〵した物語の澤山あることは素より自然の數と言はねばならぬ。蓋し、極めて幼い兒童でも夙に天の父として神を知るに適當して居る。之れ實に、聽て其の日常生活に神の事を連想して來るやうに、兒童の此の神觀が自から子供自身の一部分とも言はれ得る程になる事を示して居る。要するに、神の注意と保護とを敎ふる之等の物語、即ち神を愛し且つ賴るやうに兒童を導き得べき之等の話材は、此時期の兒童に對して最良なる靈の糧である。

(一)成年者の心意に對しては種々深遠なる問題を含んで居る天地開闢の物語は、幼兒に對しても亦夫れ相應に幾多の活畫を提供して居る。即ち、人間の爲め有り餘る程の食物を始めとして、花園の家・果物や花・黃金や寶石・動物の命名や人間に親しい其の生活振りや、さては天の父自からが天降つて夕暮にアダムやエバと一緒に歩かれた事抔がある。

(二)若し夫れ、ノアと其の箱舟の物語に至つては、存外數多の良き學課が其の間から案出せられるのであるから、さも玩具製造人の領分でゞもあるやうに淺はかに看過し去るべきでは無い。即ち、さしもの大船建造に備ふる神の注意の周到さや、あらゆる動物の生命に對する神の思慮や、休まずの雨の不思議さや、戻り來る鳩の愛らしさや、長い水上生活後に於ける安穩なる上陸や、さては子供といふ子供が皆驚異の眼を睜る彼の美しい虹――夫れは神の約束なのである――などがあるでは無いか。

(三)モーセの物語は、全然助け無き此の嬰兒に對する神の細心なる愛を敎ふるのであつて、彼の氣高くも弟思ひの姉ミリアムが、嬰兒の乳母として敬虔なる其の母をと申し出づるのにも、葦間の小舟へと此の兒の生命を救ふ王女其の人の導かれるのにも、皆其の間に又其の奥に神の奇しき攝理が籠つて居る。果然、大膽なるモーセの母は、其の信仰に對する當然の報酬とでも觀られ得るやうに、血緣の絆深くも我が子の乳母に喚ばれたのであつた。

(四)**ダビデ**に關する物語の中にも亦、幼兒の教材に屬する部分がある。即ち、熊や獅子――後者はイエスの頃には最早居らなかつたが昔は居つたらしい――の來ぬやうに其の父の羊群を見守つた事や、夜な〳〵、梨地なす大空を仰ぎ見ては聖手の業なる月と星とを眺めて、立琴かき鳴らしつゝ神の良善偉大を歌へる事(詩八篇)や、己が生業に類へては良き牧者とも謂ひつべく、神の親切加護の至り盡せる事(詩二十三篇)や、雄々しくもまた歌ごゝろある此の紅顏の少年が、當時何人も然かく眞面目には思ひ設けぬに夙くも神に愛し且つ護られて、軈てはイスラエルの王と膏灌がるべく、サムエルがベツレヘムに彼を訪へる事抔がある。

(五)**エリヤ**は神の僕であつた。そして、多艱多難なる奉仕に出で立たねばならなかつた。然あれ、神は常に彼に心を注ぎて、彼を護り且つ養ひ給ふた。即ち、饑饉に際してさへ彼の爲めにとて一つの家庭が見出され、神は彼と其の遺された家の寡婦母子の爲めにとて食物をも備へられたのである。又曠野では、鴉をして彼を養はしめられた。そして、此の勇士今生(こんじやう)の終末には、神は敢て天のホームへと驚/べき方法を以て其の所換えを果されたのであつた。

(六)少年**ダニエル**に對しては、神の如何にも情愛籠る加護があつた。即ち其の良き家庭を後にし其の總ての愛する者を離れて、あらゆる危險や誘惑の待ち構へ居る遠き國へと移された其の前後に亘る神の慈みの程は、幼き子供達には極めて恰當の物語なのである。神は終始彼を保護し、彼をして異境に於てすら猶偉大良善たらしめ給ふた。蓋し、神の愛せられる小さき人々が其の守護と導きとを要する折には、エルサレムと同樣に、バビロンのやうな所でゞも、又何處にも在す神は、到る處に自らを顯はし給ふのである。

(七)以上、掲げ來つた數種の實例は、數へも得難き舊約庫中の寶の中から幾分撰び出でたに過ぎぬ。從つて教師は、此の外にも猶幾多の物語が同等の單純さと適當さを有する事を見出し得るであらう。終りに猶一つ、彼の曠野漂泊の物語が注意

に値する。卽ち神が、蒔く事無く實る事無き地方に於て日々其の子等にマナを與へられ、岩を搏ちさへすれば一行の爲めに水を湧き立たせ得べき力を特にモーセに與へられ、蛇に嚙まれても之が癒しの爲めにと黃銅の蛇を備へられ、且つは强敵の襲擊からも彼等を救ひ、その着物も履物も舊びず又害はれなかつたのである。

四　舊約物語と初等科

少しく年輩が進んで、既に小學校に入り、尋常三年までの間卽ち謂ゆる初等科時代ともなれば上述したやうな神の注意及び保護に關する思想に加へて、此の天の父への服從奉仕が伴ふて來なければならぬ。從つて、子供の友なるイエス・キリストへの服從奉仕も考慮せられる樣になる。而して幼稚科時代に於て既に示された物語の大部分は、必然斯樣な方面へと展開して來る筈である。

(一)**アダム**と**エバ**とは、彼等を愛して彼等に必要なる萬事萬端を果された父なる神に對して服從すべき筈であつた。箱舟を出でた**ノア**は、先づ以て、彼を支へて其の愛する者等をも護られた恩愛の神を拜む事であつた。ダニエルは其の全生涯を通じて神に仕へ且つ神を敬ひ、加へ、神を覺つて信頼するやう他の人々をも導いたのであつた。

(二)神に於ける**ヨセフ**の信頼と其の忠實なる奉仕とに就ては、格段の注意が拂はれねばならぬ。彼に此の信頼があつたからこそ、エジプトに於ける其の孤獨多難の日にも何等沮喪する事無しに濟んだのである。故に、其の奴隷であつた時にも、獄舍に繫がれて居つた折にも、將た又其の位人臣の榮を極めた際でさへも、ヨセフの志操如何にも直く正しくして露違ふ所も無く、彼は常に神の爲さしめ給ふ務に忙しく、斯くして實に絕えず他人を助け又救ひつゝあつたのである。蓋し、ヨセフの生涯の秘義は、再三反覆せられて居る「神、ヨセフと偕にありき」との聖句に盡されて居ると思ふ。

(三)**モーセ**の生涯には、之を愛護せられた神への信頼服從を證する事共が充ち滿

ちて居る。即ち、彼が人となるや、總てを拋つて神に仕ふるやうになつた。死の危險が縱し眼前に迫る事があつても、神命とさへいへば其の同胞を救ふ爲めとてエジプトへでも歸還したのであつた。そして、其の紅海を過ぐる折にも、曠野に於ける凡百の自然的の危險や同胞の無理難題の眞中にも、專念一意唯神に信賴奉仕するのであつた。

(四)ナアマンの家庭に居つたヘブルの一少女は、其の奴隷としてシリヤに伴はれるに先立ち、既に夙くも神を愛し且つ之に仕ふるの道を知つて居た。其のナアマンの妻に侍づいて居た時ですらも、猶且つ自から神に仕ふるを忘れぬのみか、進んで萬軍の主なる其神エホバの豫言者が如何にスリヤ人なる主人の癩病を癒されたかを物語るのであつた。(王下五章)

(五)**サムエル**は神の家に住んで、夙に神に仕ふるの道を知つて居つた。彼はエリを愛したが、尙更エリ以上に其の父なる神を愛し、此の神が彼に命ぜられた困難にして且つ辛い使命をも、いと大膽にエリに傳へた事であつた。

五　物語と現實性

之等の舊約物語は皆、人生の實際に觸れる所が甚だ多い。從つて、兒童が夫れ等の現實性を感じて、容易く其の活光景を見得るやうに叙述せられて居る。夫れ故、子供達は之等の興味ある物語を決して忘れはせぬ。猶此の外にも偶々用ひられる他の物語があつて、夫れは何れも舊約物語の正當なる領分と思惟せられて居るらしい即ち謂はゞ不成文の物語なのであつて、讀みもて行くうち間に夫れと領かれるもの、例へば、ソロモンの少年時代や、さてはサムエルの爲めに想ひ且つ働いた家庭のハンナ抔を始めとし、聖書の記事が暗示して居る幾多の物語がある。

六　兒童向きの聖書詩

神の愛護に就て幼き兒童に敎ふる爲めには、物語以外の他の舊約文學が用ひられ得る。詩篇第廿三の如きは、此の目的に關して常に有効に用ひられて居る。又其の第

八篇の如きもダビデの牧童時代を暗示し、夜羊の群を守れる際、神の定めに從うて月と星とがそれ〴〵夜拜を營める其の光景があり〳〵と描かれて居る。想ふに此の詩は一兒童としてのダビデの信仰生活と自然に對する愛と、搗てゝ、造物主に對する彼れの愛心とを物語つて居る。次に、其の第八十四篇抔も、安住の場所として神殿の軒端又は壁龕を撰べる雀や燕の類を借りて以て、敎會に對する愛を敎へて居ると言はれて居る。而して、第百三篇に至つては、子供等の理解し居る所の恩惠を擧げて彼等を祝福し給ふ父なる神に對する讃美歌にも當るのである。

七　聖書の花鳥及び獸

レバノンの老杉よりして壁間のヒソプに至るまで、約一百種以上の植物特に花が舊約書中に見えて居る。士師記第九章には、ヨタムが樹の話を傳へて居る。又實際舊約聖書の中には、神の愛護を物語る澤山な鳥のお友達がある。蓋し、幼な心に信賴奉仕の學課を敎ふる爲めに、聖書が卑近なる事物を適用して居る優れた實例は、箴言第卅章の中に於て見出されるのである。即ち、

『地に四つの物あり、
微小といへども最と智し。
蟻は力なき者なれども、
その糧を夏のうちに備ふ。
山鼠は强からざれども、
その室を磐につくる。
蝗は王なけれども、
みな隊を立てゝ出づ。
守宮は手をもてつかまり、
王の室に居る。』　（二十四―二十八節）

問題と總括

(一)舊約聖書は、兒童が之を理解愛讀し得るやう如何にも單純であるといふが、其の意如何。
(二)舊約物語の兒童生活及び兒童に關する事項を擧げよ。
(三)特に兒童訓の價値ある個所如何、夫れ等は兒童の實生活に關係あるか、鮮活で然かも印象的であるか如何。
(四)舊約書中の詩歌は、其の如何なる部分が此の時代の兒童に適用せられるや。
(五)此の時代の兒童に對して神の愛護又は其の信賴奉仕を說くに、聖書所載の自然界は如何に應用せられるか。

第七章　舊約聖書と中等科

一　中等科課程概論

中等科の生徒は、大凡九歲から十二歲までである。一體、兒童期に於ても旣に人の個性の發達は實に多種多樣である。年齡の相違に基く特質とても到底其處に精密なる界線を畫し難いのであつて、現に前章に揭げた或る種の敎材に就ても同じ道理で適用せられる事であらう。偖て、中等科の兒童には、天の父としての神と救主又友達としてのイエス・キリストを知り、且つこれを愛して奉仕すべき事を敎へるのに、旣に充分なる素質が備はつて居る。而して、猶一層適確又具體的に奉仕の實地訓練を與ふる事も出來るのである。

二　記憶作業

記憶力の活用が特に力說せられねばならぬ。卽ち、此の時代に於ては記憶能率が

其の絶頂に達し、此の能力が當然禮拜にも將た又奉仕にも適用せらるべく、從つて聖書に載つて居る眞理の財寶がそれ〴〵銘々の所有として貯へられて、爰に聖書中の大文字に對する愛着さへも促されて來るのである。然ればこそ、兒童にして若し其の記憶力に依つて舊約聖書を體得肝銘して居るならば、此の舊約の大富源に對して其の價値を認むる事も亦一層切なるものがあらう。譬へば、實際金剛石を所持し居る者程、其の然らざる者に較べて、之を尊重する事も亦深いのと同じ事である。

詩篇の中でとりわけ先づ其の第四十六篇及び第百三篇の如きは、此の時代の兒童に敎訓を與ふる爲めに說明すべく又高唱すべく、極めて適當のものである。其他、箴言の大部分やヨブ記よりの拔萃を始め、ホゼア第十四章の數節及びイザヤ・ゼカリヤ・マラキ等の一部の如き豫言書よりの抄出など、中にはメシヤ的豫言として新約にも引用せられ居る熟知の章節もあつて、之等は皆中等科時代に學ばるべきものである。

三　舊約歷史と中等科

舊約聖書特に其の叙事的部分に於ては、前章でも既に瞥見し得られた如く彼の抽象的觀念抔とは全然沒交涉である。我等は其の間に於て、自然と人との交涉のある生の現實と活動とをさながらに觀る事が出來る。蓋し、世界及び人生の事實に對する生徒の智的要請が稍鋭くなつて來た此の時期に於て、歷史上或る種の事態は特に學ぶべきものであらう。即ち、アブラハムの移住・モーセの誕生逃亡及び召命を始めとして、シナイ進行及び逗留やエドム界隈の旅など、イスラエル民族の曠野漂泊の一部、さてはサムエルの傳記や、王朝史上の出來事、何れも皆、信賴或は攝理に關する深い宗敎的印象を彼等に敎へ得るのである。

四　中等科時代の物語

舊約聖書に載つて居る物語の大部分に於ては、嘗て幼兒に對して之と同一の話材を用ひた場合よりも、猶一層巨細に涉りて此の時代の兒童に敎ふる事が出來る。例

へば、ロトに對するアブラハムの寛容なる袂別や、續いて起る東方の王者の襲擊よりロトの救助せられしことなどは、實によくアブラハム其の人の無私と誠實とを物語つて居る。若し夫れ、ヨセフの物語に至つては、よく此の時代に適應し、神に對しての信賴と他人に對しての剛膽快活なる奉仕とを展開して居ると思ふ。次にはモーセの避難と其の宮廷生活、さてはあらゆる名譽と富とを抛ち、神に仕へて其の同胞を救はんと志すに至つた彼の撰擇の如きも、此の時代に對する絶好の課程ならぬは無いのである。其他、不思議にもミデアン人の手より其の同胞を救ひ得た勇敢敬虔なるギデオンの生涯の如き、將た又、忠實なる牧童・妙なる歌手であつて然かも雄々しき撰手であつたダビデの前半生の如き、且つは神に賴り神を愛しゝ其全生涯の如き、總て皆敎師が採つて以て自家藥籠中のものと爲し得べく、殊に少女に對しては、嬰兒モーセの救助に際しての ミリアムの從順と機智との如き、エステルが有して居つた幾多の高貴なる特性の如き、好資料として敎材に配し得べく尙ほ此の類ひのものが尠くあるまい。

五　英雄と英雄談

中等科時代に於ては、英雄を好愛する精神が大に勃興して來る。幸ひにして舊約書中には彼等の感興を唆り且つ促すべき幾多の英雄談が存して居る。而して、之等の物語は、漸く人物や其の言行に模倣せんと欲する此の時代に於て、特に其の價値の大なる事素より多言を俟たぬ。

(一)彼のダビデがゴリアテに打勝つた物語は、此の時代の兒童に適用せらるべく實に卓越した敎材の一つに數へられて居る。一體、此の物語の結構全體が至極其の目的に適應して考へられる。即ち、少年ダビデが其のベツレヘムの懷しいホームを後にして遙々此陣營に到着した時、ペリシテの巨人のみ獨り擢んでゝ、サウル王と其の部下とは全く危險と耻辱とに取り圍まれて居たので、同胞の救援の爲めに此の少年勇士が一肌脱ぐには實に屈竟であつた。然かも、彼は天父に於ける剛健なる信

仰を懷いて自ら戰線に立つたので、其の唯一の武器として小石を撰んだ事抔は、非常に兒童の興味を唆るのである。而して又之は、神に仕へ且つ同胞を救ふといふ貴い誓約を以て其の生涯を過すべく、まだ年若きダビデの無私なる奉仕として、特に注意すべき物語である。

(二)**ヨシユア**に關聯した幾多の物語は、如何にも良く此の時代に適合して居る。ヨルダンの徒渉り、エリコの陷落、將た又、ギベオン人救援の爲めに長途の急行軍を爲し、ベツホルンでアモリの五王と會戰して大勝利を得たる事、さてはイスラエルの全會衆を招致してエホバ神への奉仕を誓はしめた彼の生涯の雄々しき終末抔、即ち夫れである。

(三)士師記に於ては、デボラとバラクを始めとして、ギデオンやエフタなどの戰爭及び勝利、皆孰れも此の時代に有益且つ有効であらう。中にも、エフタは神に喜ばるべき如何にも美はしい性格の所有者であつて、嫉妬深い兄弟達の爲めに其の父の家から逐ひ出されたに拘らず、來襲したアムモン人の軍勢が彼の同胞を脅かした際に、決して復讐的に返り討抔を志さず自ら進んで其の同胞の急を救ふたのであつた。

(四)若し夫れ、彼の**エリヤ**が神に於ける信仰を以て當つた勇ましい戰爭談や、カルメル山上にバアルの祭司等と勝を爭ふた物語の如き、何れも此の時代に適切なる學課である。此際、エリヤは唯獨りで以て、如何にも腐敗しきつたバアル敎の全祭司と會したのであつて、彼れの勝利は軈て、正義と眞理と純潔とが當時イスラエルに横行して居つた虛僞や不淨に打克つたにも當つて居る。ヨセフやダニエルの傳記の中にも亦、神を信じ正義を愛する幾多の敎材を含んで居る。要するに、之等英雄の戰爭や勝利の物語は、其の道德的價値に於て如何にも立ち優つて居た。彼等は皆眞理を愛した、彼等は皆神に信賴した、彼等は皆敢て他を助ける爲めに戰つたのである。彼のペリシテ人の心無き殘忍の所行も終に、サムエルやサウルやダビデの爲

めに其の跡を絶たしめられた。またヨシュアの度重なる勝利は、聽て數多の畢惡をば皆バレステナのの外に驅逐し去つたのである。

六　物語に含む個人的要素

抑も、人の個性は此の中等料時代に於て顯はれ始める。然ればこそ、第一人稱の代名詞は愛着を以て用ひられ、從つて自我が急に其の頭を擡げて來て居る。所が、幸ひな事には、舊約の物語や歴史の文學が、十中八九皆、人生の此の方面を高唱して居るやうに思はれる。索引を作つて見ても判る事であるが、一體、聖書には第一人稱の代名詞が隨分度々用ひられて居るので、夫れは實に、歴史豫言及び詩歌の總てを通じて殆んど孰れの頁にても讀まれるのである。著し、人格に關する此の强く且つ反覆せられた高唱は、畢竟、聖書をして常に人格的の書物たらしめる要素の一つと言ふ事が出來やう。

(一)例へばヨセフの如き、其の個性の面目實に躍如たるものがあつた。即ち彼が

野に群を守つて居る其の兄達の許に使した時には、如何にも立派に盛裝して居て、宛かも父ヤコブの家に於て寵愛せられる儘に增長して居つたかと思はれるばかりであつた。果然、晝は麥の束、夜は星といふ彼れの夢にしても、徹頭徹尾自家の榮譽を憧れる事如何にも急であつて、其の間自から父母兄弟に服從を迫る心があり〳〵と讀まれて居た。然るに、此のヨセフ一旦エジプトに囚はれ行きて奴隷の苦役に就くや、從來のやうな自己肯定を拋つて無私有爲の奉仕に勵むべき必然の體驗を示し來つたのである。

(二)多少の相違こそあれ、モーセもルツも又エステルも皆略ぼ同樣の課程を敎へる。即ち、彼等はそれ〴〵に剛健なる個性を有してゐて、一意自家に把握抱擁する所多からん事を志してゐた。然るに、彼等は總て總てをかなぐり棄てた。中にもモーセとエステルとは、神に仕へて其の助けを要する人々の爲めとて生命をも堵したのである。エステル丈けに就て言へば、彼の女には利己的の安逸を貪つて未來の榮

燿を謀らんとせば、樣々なる好機會が眼前に横はつて居つたに拘らず、實に同胞の安寧幸福の爲めには我れと我が身の破滅の道をば撰び採つたのであつた。若し夫れ舊約歴史の一層後代に至つては、彼のネヘミヤの如きも亦、大王の宮廷の高位に贏ち得て居た有利の環境を自ら卻け、進んで危機に瀕してゐた同胞を擁護扶掖したのであつて、此の邊、エステルの際と同じく價値偉大なる教訓を有して居ると思ふ。

七　自然界の教材

舊約聖書に見ゆる鳥や花に就ては、幾分既に初等科の場合に學んだのであるが、中等科に至つては猶更其の間に一層有益なる教材を含んで考へられる。律法の書中にも、彼等の注意を惹いて其の反省熟慮を促すやうなのが尠く無い。即ち、鳥の巣の防護（申二十二章六―七節）の如き、ノアが鴉と鴿とを箱舟から飛ばした事の如き、さては果樹の保存（申二十章十九―二十節）の如き、何れも其の適例であらう。現に豫言者達にしても、鳥や獸や草木を借りて以て、神の愛護や其の善性を譬へて居るので、特にホゼアやイザヤ並びにエレミヤには斯種の實例が多い。又ヨブ記の終りの數章にも、神の知慧や、愛護の解説に、自然界を假用した所甚だ豊富である。而して、詩篇の中でも、其の第八篇・第九十二篇及び第百四篇の如きは、皆神と其の良善とを敎ふる爲めにと自然界の事物を採つて居るのである。

八　「神の家」としての愛教會心

幕屋と神殿とに關する物語は、何れも皆、教會に對しての愛敬と熱心とを鼓吹するのに、屈竟の教材なのである。而して、幕屋に就ては、出埃及記と民數紀略、神殿に就ては列王紀略と歴代史略が、それ〴〵に豊富なる記事を有して居る。即ち、幕屋の中で其の年少時代を過ごしたサムエルの家庭、全地の主たる神の此の世の家たるにふさはしく神殿を建てやうとのダビデの願望、閑却せられて居た神殿を復興美化したヨシユアの善業など、中等科の兒童には極めて優れた實例であつて、皆彼等に訴ふる所痛切なるものがある。降つて囚虜時代の後と雖も尚且つ神殿再建の事

は忘れられず、其の敵者の烈しき反對の間にも之が遂行を觀たのは、素より敬虔の念の表現であるとはいへ、亦實に英雄的努力の結果たるを失はぬ。要するに、神殿の建設は興味實に涌くが如く、之が奉仕の意義及び効果に於ても、兒童の愛敎會心を勃興せしむるは與かつて力があると思ふ。

九　地理の適用

此の時代に進むと事物の正確を期する觀念が鋭くなる上に、生徒達は小學校で既に地理を習ひ始めて居る事であるから、聖書地理の適用も亦決して閑却が出來ぬ。視覺に訴へて聖書の學課をば正確に記憶せしむる爲めに、聖書地圖が必ず敎室毎に掲げられねばならぬ。蓋し、歴史や傳記抔といふものは、之を地方別に考察して來る時に、極めて正確で又甚だ敎訓にも富むのである。例へば、まだ年少の貴公子であつて其の父の寵者であつたヨセフの物語にしても、地圖上の智識と相俟つて始めて情趣も加はり來るのである。卽ち、ヘブロンを出でゝ、先づ北の方ベッレヘムへ次でドタンに居る其兄達を探す爲めシケムに赴いた。然るに未だ數日ならざるに、彼を虜として伴ふミデアン人達は其の同じ道を戻るのであつた。斯くてヨセフが其の父ヤコブの誇りたる寵者の夢から醒めて、將に奴隷に賣られやうとする此の過程は地圖無くしては到底畫龍點睛を缺くの嘆を免れまい。

また、不從順の刑罰と不信仰の悲哀とは、イスラエル漂泊の地圖に依つて雄辯に敎へられる。卽ち、彼等がカデシから北へと直ちに最捷路を邁進する事を拒んだばかりに、其の東境よりしてカナンの故土へ入る前、永い年月の間辛慘極まる旅路を續けねばならなかつた。又士師達の物語にしても、敵の侵入地點と之が滅落の爲めとて救援者の起つた地點など、何れも地圖に依つて指示するで無ければ所詮理解せられぬが常である。

聖書の物語講解上に、如何程地理上の智識が肝要であるか、其の一例として、敎師はイザヤ書の第十章廿八—卅二節を讀むが宜い。卽ち、此處で豫言者は、彼の一

都邑又一都邑と疾風の如くに片つ端から占領し、終に勝ち誇つてエルサレムにまで進軍したアッソリヤ人の有樣を描寫し、終に此の侵入者都の城壁に迫り「シオンの娘の山に向ひて手をふる」所まで說き及んで居るのである。

問題と總括

(一)詩篇・箴言及び豫言書の中から、中等科時代の兒童に適當なる諳誦の章節を撰び、之を目錄に作れ。
(二)如何なる歷史的敎材が、中等科の爲めに用ひられるか。
(三)聖書の物語を選擇するのに、之を幼童の場合に較べて如何樣の進步があるか。
(四)何故、特に英雄談が撰ばれるのであるか、其の目的に適ふ話材幾つかを示せ。
(五)此の時代に於て發達しかゝつた個性は、如何樣にして舊約聖書で以て涵養せらるべきであるか。
(六)此の時代の生徒は自然界の事物に興味を有するか、其の聖書との關接點を示せ。
(七)兒童の愛敎會心を一層隆んならしめるのには、如何樣な物語が用ひらるべきか。其の適例を列擧して見よ。
(八)學課毎に聖書地理が利用せられる助けとして、各敎室には如何樣な準備を爲すべきか。如何にして地圖上の知識が增進せられ得るであらうか。

第八章　舊約聖書と高等科

一　高等科課程概論

中等科の爲めにとて前章に擧げた敎材の大多數は亦、此の高等科時代特に其の前半即ち十三歲から十五歲位までの間にも襲用せられる。然し、たとひ同一敎材であつても、其の撰擇及び表現の方法に就ては多少の考察を要すべく、其處には幾分進步の段階が存するのである。即ち一層幼少であつた時代とは、全然其の特徵が異つて居る。記憶力が今猶敏捷に働くと共に、理知を追ひ求むる能力が一層少年の心意發動の上に其の權柄を振ひ始めて來る。冒險家や英雄を愛好する念は昔しに變らぬが、猶其上にローマンチックな感じが增し加はるが常である。社交的の趣味が肯認せられるから、從つて團體精神の時代とも言ふ事が出來る。前時代同樣に個性の心的活動は猶顯著ではあるが、夫れと共に、集團や人類の幸福に自らをば同化するや

うに傾いて行くのである。

又此の時代は、晝日中夢みつゝある。一體、少年の精神には種々なる理想が群り集ふて居るので、謂ゆる此の『十代の時期』は、啻に英雄を好愛するのみならず、進んで將軍や政治家や富豪などを崇拜する時代なのである。蓋し、人間世界には是非共幻を要するのであるが、今方に成人しつゝある少年は、少くとも此の憧憬心を一要素として持つてゐる。然ればこそ、案外に純眞なる詩情や歌ごゝろが斯る折柄に動き、發明發見などの精神も亦盛んに此の時代に發動して居る。實に彼等少年は進んで一層高き理想や社交の領域に入つたので、之が教養に當る者は須らく彼等の新しき必要や理想を滿足せしむるやうにしなければならぬ。

二　教材としての傳記

歴史特に傳記は、此時代の教材の大部分を占めて居る。即ち、此の時代の生徒は縱し如何樣に話した所で、自から銘々の理想として居る英雄を目懸けて歴史へと其

の心意を旋回するのであつて、正確を期する彼等の觀念は今や一層確實となるのであるから、歴史上の人物や其の功績をば能ふ限り實現保持するやうに努力せねばならぬ。既に現實に愛執して居ること故、決して神話や寓意の裡にそれを蝕食せしむべきでは無い。此時代の少年は正確なる話を喜び架空的の物語を嫌ふ、即ち個性の面目躍如たるを喜ぶのである。所が、幸にして舊約聖書の記載には恰當の教材如何にも多い。夫れは幾千年かの昔に書かれたものではあるが、讀みやう次第又話しやう一つでは、如何なる時代にも代表的の人物型たり得べき特性が明白なのである。一體、之等の傳記は如何にして有効に用ひられるのであるか。

(一)**アブラハム**は、其の親族を離れ又自分には慰安や利得のある其の家庭を後にして、我が家もあらぬ放浪漂泊の旅路に上つた。彼の大望心は決して、羊群を殖したり、財囊を肥したりする事では無かつた。然しながら、彼は總ての時代の總ての人々の爲めに、信仰を贏ち得べくあらゆる事物を抛つて仕舞つたのである。彼は實

に雄々しい人物であつた。果然、其の偉大なる犧牲は勝利の冠冕を値した。而して獨一神を信ずる世界の三宗教、即ち基督教とユダヤ教とマホメット教とは皆、彼を信仰の父と呼んで之を父祖と爲したのである。然ればこそ、彼が永い辛い此の漂浪の物語には、彼等を教ふるに充分なる意義が籠つて居る。

(二)人らしい人とも言ふべき**モーセ**は、主として其の搖籃時代の人を魅するやうな物語故に、一層年少時代の兒童には甚だ興味が深かつた。然し、少年が特に心惹かれる點は寧ろ此の外にある。即ち、此の剛健不撓にして且つ宏量海の如き人格常に表に顯はれて、其の忍耐無私忠實の英雄主義が憧憬渇仰の的となるのである。

(三)若し夫れ、**ヨシユア**の偉大なる成功に至つては、確かに省察の價値がある。烏合の衆ともいふべき何等訓練無き移住民の大集團を率ゐて、充分戰に熟達して居るカナン人の軍勢に對抗した彼れの將軍振りには、實に驚嘆に値するものがある。

(四)サウル王を避けて居つた幾年月に於ける**ダビデ**の業蹟(母前二十—三十章)と彼が史上の偉人ダビデとなる迄の數ケ年とは、此時代の少年に取つて屈竟の教材である。ダビデの此の數年間は彼にとつては確かに其の決斷期とも言ふべきであつた。此の間の出來事として數へ上げらるべきは、サウル王に對する彼の公義と親切、其の友人達に對する彼の忠實などを始めとして、さては彼の部下が其の幼な馴染であつたベツレヘムの古井戸から生命をも賭して汲み來つた水を飲むに惜しとて拒けた彼の高潔なる言動の如きである。斯くして、此の名將ダビデの偉大は、其の純眞なる神々しさと高潔なる衷情とに依つて裝はれるのであつた。

(五)**ダニエル**と其の三人の友達の純潔なる生活並びに勇敢なる功業には、實に有益なる一教訓が含まれて居る。彼等は神に於ける信仰を以て、人を魅惑せんばかりの害惡の世界に在つて能く自らを純潔に保ち、困難にして且つ不馴れな課程を其處バビロンの學校で課せられても終には之を體得する事が出來た。而して、世に出づる爲めとて斯種の準備を果たした後ち、若しや少しでも信仰や德行に背戻するやう

な怖れでもあると、如何に其の事に心惹く親みがあつても決して之を卻くるに躊躇しなかつたのである。

(六)**エステル**の物語も亦此の時代に適當する。當代の最大權力を擁した王廷、王者の行列の華々しさ、さては王宮の饗宴の浪費極る驕奢抔、孰れか此の物語に興趣湧くが如き結構を與へぬものがあらう。折しも斯るステージの眞中に出現した凜々しい年少の妃、其の同胞に必要とあらば彼等を救ふ爲めに己が貴きをさへも棄てゝ顧みず、折角に贏ち得たる皇后の地位をも弊履の如くに輕んじたのである。所詮は一代に傑出せる此の美しくも威嚴ある一婦人の穩健にして然かも私無き其の間の行動は、現世の魅惑以外に超然たるべき信仰の勝利を敎ふる所如何にも深甚なるものがあると思ふ。

三　舊約に於ける傳記の理想

前述した所に徵しても、之等の傳記には何れも戲曲的又現實的の要素の存する事明白である。其の主人公たる男女は皆現實の人物であつて、如何にも雄々しき所よく年少者の心情に觸れる事が出來る。然は言へ、之にも優して一層高唱すべきは道德的又靈性的に彼等の理想が氣高かゝつた點であつて、現に彼等も亦其の方面に努力して息まなかつた。即ち專念眞の神にのみ倚賴するアブラハムの不可抗的信仰、神に仕へ人に幸ひするモーセの忠誠、人をして敬愛措く能はざらしむるダビデの寬容と剛健、さては天禀と思はれるエステルの雄々しさ抔、誠に後世にも其の類ひ稀れな程である。要するに、舊約聖書は人各の衷心に育まれた至高至聖の理想を敎へて、其の間自から邪曲貪婪と抗爭する此の理想の苦鬪をば曝露して居るのである。げに此の理想こそは、父なる愛の神に於ける信仰、全世界をして彼を知り且つ愛せしむる爲めの敬虔なる奉仕に外ならぬ。即ち、此の理想の献身的遂行に依つて之等舊約の男女も靈界の英雄となつたのであつて、延いては、種々なる理想が追隨撫育せらるべき中等科時代の少年少女に對して有意義至極なる傳記の數々を提供する事

ともなるのである。

四　兒童の世界心と舊約聖書との交渉

此の時代の少年少女は既に世界の市民なのである。從つて彼等の同情は夙くも正しい意味では血族的なる人類を包擁して居るのであつて、世界的交渉のある聖書歴史及び其の文學が彼等の興味を唆る程になつて來て居る。然かも、斯くして日曜學校で養はれた世界心は、幾年かの後に至つて、即ち、他の民族が如何程イスラエルを敬慕して居たか、又イスラエル自體が如何ばかり其の周圍に感化を及ぼしたかを覺り得て後ち、始めて實現せらるべきであつた。

夫れは兎に角、年少者の斯種精神要求は、自から一般普通の歴史と感應交渉する事にもなつて來る。從つて、中等學校の歴史料と日曜學校の教科との間に、興味上の連絡の促される事素より自然の數なのである。

抑も、エジプトは、文化に寄與する所甚だ多方面にして且つ豊かなのであつたが、ヘブル民族は實に此の國と數世紀の永きに亘つて緊密なる關係があつた。また、バビロンは正義の心よりして律法を編成した國であつたが、其の律法が轉て舊約聖書の生命ともなつた。即ち、其の大部分は幾多の邦國の爲めにとてモーセ法として傳へられたのであつて、其の原型とも言はるべきバビロンのハムラビイ法典の方は何時しか人類の記憶から薄れ行いたのである。

彼のイザヤが生存して活動した頃には、既にロマの國家も創建せられて居たので、其の文明の曙光が漸く小亞細及びギリシャの邊を暈かし初めたのであつた。また彼のダビデの時代以降ハガイやゼカリヤ抔まで諸書の中に記されて居る事件は皆、恰かもギリシャの榮華の曉頃に當り、エズラやネヘミヤの時代に至つて其の文化は中天の光耀を示してゐた。之を要するに、舊約聖書は、感化しつゝ又感化せられつゝ偉大なりし古代文明の間を通過したのであつて、死せるが如き彼の碑銘などよりも猶一層の現實性を把持して居るのである。

五　記憶作業

舊約聖書中の重なる個所々々の諳誦は、既に下級に於て始まつては居るが、此の高等科時代に至つても猶繼續せらるべきである。然れば、歴史との交渉濃かなる詩篇、即ち其の第四十六篇や第百三篇若しくは第廿四篇抔が、啻に口頭のみに止らず生徒の衷心深く刻みつけられねばならぬ。

又歴史的の書冊中にも我等に親み深き有名なる章節があるので、例へば、彼のルツが最後までの貞節を誓ふ言葉や、豫言書中のそちこちに見出される佳言名句の如き、何れも皆此の時代に於ける他の教材と關聯して體得せらるべきであると思ふ。

六　社會的要素

成年期（アドレッセント）（男子は凡十四至廿五歳、女子は凡十二至廿一歳位の間に當る）の初葉とも言ふべき此の時代に於ては、社會的及び集團的の興味夙くも芽ぐんで居て、律法や豫言の諸書中には夫れとの接觸點著しくは教訓が幾つでも見出される。此の見地よりして、十誡や契約の書（出廿—廿三章）なども讀習せらるべく、社會的正義の書たる申命記も亦數多適切なる課程を有して居る。蓋し申命記の正義觀念は人類同胞主義を其の根底とし、從つて神の父性も之が基調となつて居る。即ち、人々の權利を擁護して以て國體の爲めに清き個人生活を要請する彼の第十五章及び第廿—廿五章の如きは、親切扶掖及び公義を奬勵して、簡明に同胞主義上の義務を教へて居るのである。

豫言書に於ても、之れと種類を同じうする幾多の章節がある。即ち、アモス書第二章六一八節や同六章一—六節や同八章四—十節の如き、又はイザヤ書第三章一—十五節や同五章八—廿三節の如き、其他ミカ書第六章六—十六節の如き、何れも皆詭謀や壓制を難じて眞理と正義との發揚を求めて居る。所詮、豫言者達の社會的理想も亦、父なる神に於ける信仰と、其の子供たる人類相互の愛と公義との外に出でぬのである。

若し夫れ、傳記的記錄の部分に於ても、公義を教へて社會奉仕を促し得べき幾多

の物語が見出される。即ち、アハブとナボテの葡萄園（王上廿一章）或はゲハジの貪慾虚偽など、當然撰び出さるべき話材の適例であらう。また、ダビデとウリヤとに關はれるナタンの譬喩（母後十一二兩章）抔も、我等同胞の正しき關係を示せる屈竟の教材と思惟せられて居る。

問題と總括

(一)中等科時代は如何なる必要及び能力を有するや、而して其進歩に如何なるものありや。

(二)舊約の傳記及び物語中に彼等に適用せる如何なる教材があるか。既に掲出した人々以外に、舊約時代の英雄の現實性及び劇的活躍を示すに足るべき人々をば自ら撰び見よ。

(三)此の時代の生徒に、適切なる舊約の傳戯中に含まるゝ理想は何々であるか。

(四)同胞性及び普遍的同情心の意識的發達に就て、學び得た所を記せ。

(五)諳誦の効果如何。舊約の歴史詩歌及び預言の中から諳誦に適せる個所をば自ら撰び出せ。

(六)此の時代は、公平正義扶掖等の諸德を渇仰體驗せしむるのに適當では無からうか。且つ（豫言者の特徴とも言はるべき社會的の公義及び奉仕に關聯して）舊約聖書の大使命は何であるかを指示せよ。

第九章　舊約聖書と青年科

一　逸出期から批判期へ

普通に逸出期と稱（とな）へられて居る高等科時代から進んで此の青年科時代ともなれば、屢々日曜學校への出席が怠りがちになつて來る。即ち、進んで更に高等の學校に入るか然も無くば實社會に入るかして、爰に新しい地歩が踏み出される時とて、此の場合日曜學校の引力も強ち成功するとは限らず、謂はゞ日曜學校の批判時代なのである。青年をして此の危機を恙（つゝが）無く通過せしむる爲めには、大に聖書研究の方へ其の注意を惹き着け、彼等の新しい靈的必要を滿足させるやうに仕向けねばならぬ。

抑も此の時代の特徴は理想主義なることである。然かも其の理想主義たるや白熱的であつて、之を或る組織の下に實際化し始むるのである。蓋し、凡そ十八歳から

廿五歳までの心的狀態は、偏に品性と成功との二點に集中凝結するのであつて、道德上の價値は愈々明白となり、社會的衝動亦漸く强大となり、人生に於ける敬虔の要素また顯著となるゆゑ之が涵養を要求する事も眞に痛切なるものがある。加之、此の時代は指導といふ事を肯定し始むる頃であるから、當然之が訓練も考案しなければならず、また恰度傳道心が燃えて其の志が此の方面に傾くべき時期にも際會して居るのである。之を要するに以上列擧し來つた幾多の特性をば强め且つ導く爲めに、我等は是非共其の材料や方法をば熟慮すべきである。

二　教授の目的及び結果

既に此の時代ともなれば、たとひ同じ舊約聖書であつても、何等論理上の思慮無しに、唯斷片の集群とのみ合點して取扱ふ事は出來ない。其の部分々々には必然連絡があつて、それ〴〵にまた明確なる目的を有して居ること、即ち、決して唯或る民族の歷史といふのでは無く、實に何等か或る一つの目的を有する民族史なのである。或る意味に於ては、神の歷史とも言はれやう。更に詳しく言へば、神が人に對して慈悲深い目的を有して賢く之を處理して行く、其の連續せる局面の啓示に外ならぬのである。記錄の各部分は、自から此の目的の靈線に依つて一束とせられて居るとも思はれる。所詮、青年者に敎授するには、記錄の統一連絡を閑却してはならない。試みに、一二の助言を附して置かう。

(一)創世記の全體及び出埃及記の初の數章は、其の後者の第十九章に記された、舊約の中心とも斷せらるべき、彼のシナイの嚴肅なる光景に達するまでの小引たる觀がある。之に次で第廿—廿三章には通常「契約の書」と呼ばれて居る十誡と他の小法典とを含むのであつて、依つて以て、イスラエルは神の僕として聖別せられ、神は契約の關係上特にイスラエルの神とはなつたのであつた。降つて豫言者に至れば、其の大部分は皆結婚の形式を以て此の關係の復興を鼓吹し、若しもイスラエルが之を破棄して顧みぬやうな事があれば、心靈上の姦淫であると彼等は之が排斥に努

めたのである。

(二)斯種の契約を實際に履行するには、當然其の本據となるべき所が無ければならぬ。爰に於てか、出埃及記の後半と列未記とには、彼の幕屋の建設適用及び禮典に就て述べられるにも至つた。次で、曠野の漂泊に際しての神との契約關係と、既に實用せられ始めた律法の價値判定及び適用とに於て、民數記略が其の當初の經驗如何を記して居る。若し夫れ、申命記に至つては、彼の大指導者モーセが己れの地位をヨシュアに讓り、其の獨特の雄辯により、イスラエルが永く其の神エホバに忠誠を致すべく訴へて以て留別の辭と爲した邊りが、恰度此の結集の壓卷にも當るのである。

他の歴史書を通じて、皆斯種の統一や計畫の跡方が辿られる。此の事實は卽ち論理と整合とを愛好する青年の心理に適應するので、彼等を有効に敎ふる爲めには之等の性向に投ずる事を怠つてはならぬ。

三　舊約聖書の文學的卓越

抑も、舊約聖書は文學の最上乘なるもの、其の多種多樣にして類ふべくもあらぬ美はしさは、大文學を愛讀して理想主義に熱中する年輩の青年に提供するの價値頗る豐かなものである。(げに神は我等の周圍に美はしく此の世界を造り給ふた。而して、慈愛と優雅に裝ひたる書中に神御自身を啓示し給ふ事は、偶々以て神の喜びで無ければならぬ。)殊に其の歴史書に於ては、叙事的又戯曲的の力の籠つた多くの個所を提供して居るのである。

飜つて豫言書には幾多の文學上有名なる型が示されてゐる。卽ち、其の一例はアモス書第六章であつて、其處には國民的傲慢・個人的貪婪及び宗敎的冷淡が叙述せられて居る。彼は、彼の象牙の床を伸べ、詰らぬ俗謠を歌ひ、且つ腹一杯に酒を飲んで居て、今將に其の上にも猪突し來らんとする國民的危機に就ても一向悲む容子も無く、逸樂に耽りつゝある其の同胞達に對して脅威の言葉を放つのであつた。イザ

ヤはまた屢々、其の第卅五章又は第五十五章杯のやうに、美はしい自然のシムボルを以て約束の救拯を讃咏するのであつた、之等の個所は何れも萬人が記憶に留むる丈けの價値を有して居る。若し夫れ、エゼキエルの叙述に至つては筆鋒實に鋭利辛辣を極め、ツロの傲慢詭詐に富みて擧措に何等落ち着き無きをば目して、全世界の公盜又は壞亂者とさへ斷じて居る（第廿七八兩章參照）のである。

詩篇に眼を轉ずれば、其處には幾多の想像や表現の傑作がある。即ち、天地創造の抒事詩たる其の第百四篇や、聖殿の歌たる第八十四篇や、其他神の啓示の偉大や慈愛を讃へたる抔其の他にも種々あるであらう。又其の第六十五篇の如きも讀む程の青年は其の心裡に之を喜ぶのであつて、其處には神の良善を主題とせる此の聖樂（オラトリオ）を成すべく、果樹園や野原、丘の斜面や谷間、露や雨、果ては朝夕や羊の群と苅入のぞめき抔、總てを容れて以て微妙なる管絃齋唱の大音樂をば眼前に展開して居るのである。蓋し、之を筆頭に詩篇の若干及びヘブル文學中の他の部分に於て、優に世界最大の音樂としても其の模範たるべく、之がインスピレーション亦靈性の琴線に觸れて推賞を値するもの、屈指に遑無き程なのである。

四　舊約聖書のローマンス

此の時代はローマンスの時代である。由來、斯種の物語は青年の興味を唆（そ）るのであつて、依つて以て、彼等の心情を捉へて聖書に近づかしめ、且つ我等に有り觸れたる日常生活の全態に親ましむる一方法ともなるのである。從つて、彼等個々の情愛や人格的接觸に對しても同情籠れるものをば自ら其間に見出す事が出來やうと思ふ。舊約聖書には幾多の戀愛物語があつて、夫れ等は何れも皆世界の總ての文學中で最も美はしく又最も理想的なものである。而して、其の總てが、戀愛や結婚をば神聖ならしむるに與かつて貢献する所が多い。近時、我が國の或る方面に於ては性の教育が頻りに高唱せられるのであるが、他方にはまた謂ゆる新しき道德を鼓吹して基督教の貞操觀をさへ蹂躪せんとする傾向が見える。此の時に際し、青年の性問

題に對して聖き理想と正しき指導とを與へ得ん爲めに、舊約聖書中よりして斯種の教材を適當に採用する事は、青年科の教師にとりて眞に當面の責務であると言はねばならぬ。

ボアズとルツとのローマンスを描いた彼のルツ記を讀んで見ても、格別に情感が横溢して居るのでも無く、さりとて同種類の他の物語に比して敢て表現に雅致があるといふのでも無いが、然し、其の間に頷かれるルツの美はしさ、其の撰民の生活を通じて會得せられたイスラエルの神に對する彼の女の熱愛、さては彼の女の勤勞振りと其の表情の純潔さ、而して、ボアズの雄々しさと寛容、此の物語を一貫せる興味、舊きベツヘレムの生活や風習に彩られた異常なる美はしさとの觸接など、何一つとして此の短かき物語に親しみて、之を愛せしめぬやうな所があらう。

我等は亦、創世記第廿四章に於て、其の美はしさおさ〳〵ルツ記に劣らぬのみか、眞の宗教的情感の著しき他の戀愛物語を見出し得る。然ればこそ、或る教會では此

章を結婚の儀禮に際して誦讀する程に重んぜられるのである。而して、イサクとリベカとを主人公とする此の物語に於て、我等の讀破し得べき宗教味は實に豊かであらう。即ち、エホバ神の統御と其の仁慈に富める攝理とに對する信仰、我等の日常生活に對する神の賢明なる指導、我等の衷情及び家庭に於ける神の眷顧の如きは、確かに其の一端である。斯くて、神の言葉は我等人類の衷心に記憶せられ、軈ては牧野や園爐裡や王宮の行事の間にまでもローマンスの金線が織り込まれて行くのである。ルツやリベカの物語は、素より其の一二の例證たるに過ぎぬ。

五　奉仕の最高動機

舊約聖書に於ける一層偉大なる道德的價値及び心靈的價値が青年に對して展開せられねばならぬ。彼等は實に、今方に夫れ等の價値を愛執熱望する時代に到達したのである。而して、斯種の性格を學ぶに當つては、屢々聖書に於て用ひられるやうに、彼此對照して行く事が出來やう。

(一)**モーセ**と**バラム**との間には、斯種性格の反襯がある。即ち、神の眞の僕なるモーセが一層高き方を撰びて、一時罪の享樂に耽らんよりも寧ろ神の民と共に苦しめられる事に耐へ、目に餘るエジプトの財寶よりも却て基督の豊かなる富源に近づく事を貴べるに對し、バラクは、神の聖旨如何は充分に辨へながらも猶金銀を貪り取る事をのみ企てた、似て非なる豫言者なのであつた。

(二)**サウロ**と**ダビデ**に於ても亦、利己的極まる野心と全然私無きエホバに對する奉仕との兩極端を代表するのであつて、其處に自から眞の王者と僞りの王者との面目が對比せられて居ると思ふ。

(三)**アハブ王**は淺ましくもイスラエルの神に裏切つて悖德狂信なる異敎神の隨喜者と成り果てゝ居るが、豫言者**エリヤ**の方は其の持てる總てを提供し、生命さへも賭して唯一純眞のエホバ神に奉仕して居るでは無いか。前者が其の國民を惡に陷れたのを、後者は夫れを挽回復舊せしめんと努力するのであつた。果然、アハブは滅びた。然し、エリヤと其事業とは永遠に生くるのである。

(四)また彼の**エステル**の如きは、其の同胞を見棄てゝ恥辱の間に生きんよりは寧ろ其の民の救に努力して死ぬるを以て己が本分とした。爰に、恰度其の畢生の事業に取り掛らうとして居る青年に對して、宗敎的英雄主義を鼓吹する好敎訓が備はつて居る。

(五)要するに、聖書は啻に或る國家若しくは國民全體の苦鬪を描いて居るのみで無い、一層高い意味に於て個人心裡の爭鬪及び勝利をば宛がらに寫し出して居ると思ふ。蓋し聖書の人物は如何にも現實的で且つ人間らしく現されて居る。故に、我等は彼等の裡に自分をも見出し得るのであつて、彼等に依つて人生訓を學ぶ所決して尠く無い。近頃、一人の思慮ある基督者は斯く言つて居る。「自分は、今の傳道者が說敎をする時、猶一層屢々舊約の人物に就て述べん事を望む。彼等を通じてこそ我等は實に我等に對する舊約の使命をば最も良く辨へ知る事が出來る」と。注意す

べき點では無いか。

六　メシヤ思想

舊約聖書の全體を通じて、神は始終イスラエルに注意を拂ひ、彼等の苦闘に際しては何時でも之が配分に與かられたのである。然れば彼等が危險に遭遇したり失望に陷つたりした場合には、來らんとする解放の約束を與へて以て彼等を勞はり且つ勵ますのであつた。而して、其の時の滿つるや、神は果して自ら解放者を送られたのである。來るべき事が一見甚だ遲延する如く思はれる事もあつたが、然し夫れは確かに來るのであつた。即ち言ふまでも無く、メシヤ思想なのである。而して、眞紅に染められた此の救拯の緣の絲は、舊約の各部分又各時代を繫いで一貫して居る。創世記當初の約束（三章十五・十二章二・四十九章十節等）を初めとして、後年に於る豫言（賽七章十四・九章六及び五十三章米五章二撒九章九馬三章一節其他）に至るまで、其の間には實に斯種の思潮が流れて居たのである。從つて、舊約の各時代に

於て、此の約束が如何なる形式を採つて以て其の折柄の必要に適應する所があつたか。斯る見地よりして舊約の全體を通觀したならば、興味もあり又有効なる事であらう。

七　傳道的精神の涵養

青年の傳道的精神を涵養する爲めには、十二分なる顧慮が爲されねばならぬ。舊約には本來世界大のメシヤ王國に關して幾多の引照が含まれて居るのであつて、世界の各國民が聽て神の許に來るとの聖旨は、詩篇第七十二・九十六―九十八・百等の諸篇や、イザヤ書の第四十九・五十五・六十の諸章及びヨブ記抔にも窺はれるのである。而して、傳道的精神鼓吹の爲めとならば強ち爰に擧げた數個所のみならず、他にも澤山ある。所詮、メシヤ思想は殆んど其の總ての場合他の國民又は民族をも含有して居るのであるから、從つて傳道的精神も亦自から其の間に力調せられるのであつた。

此時代に於て、歴史や文學の比較研究を試みる必要がある。何となれば舊約に於て歴史以外の文學即ち其の豫言と詩歌とは、自から歴史若しくは歴史の解説として其の一部分に當る事が多いのである。兎に角、舊約聖書に於ける神聖なる啓示が如何樣に發達しつゝあつたか。之が充分なる理解を得る爲めには、歴史以外の舊約文學をも猶史的見地よりして研究する事が是非共必要なのである。例へば、彼のイザヤ書全體と同時代の作たる詩篇の或るもの——(第四十六篇の如き)——は、當代の歴史的事實に關聯して研究すれば一層能く理解せられる。其他イザヤ書の第卅六—卅九の四章の如きも列王紀略の下に繰返されて居るから、彼れ此れ對照の要があり、またエレミヤの豫言にしても、其の國の瓦解と其の民の虜囚との以前、約半世紀に亘るユダ王國の歴史と參照しないでは到底滿足に會得せらるべくもあらぬ。然れば舊約の文學研究に當り、能ふ限り其の背景たる當時の民族史の見地よりして講究すべきであつて、依つて以て歴史の方にも斜光が投ぜられ、搗てゝ、豫言や詩歌の方にも興味が加はつて來るのである。

問題と總括

(一)青年期の特徴に就て各自充分明確に知つて置かなければならぬ。

(二)舊約の文學ならぬ一般の歴史的記錄の目的及び効果如何、謂ゆる「五書」や其他の歴史書に當て鉄めて考察せよ。

(三)舊約聖書の文學的にも優越してゐることは、舊約聖書自體の興味を鼓吹するに有効であるか如何か。之が解説の爲めに、各自適例と思はれる個所々々を指摘せよ。

(四)此青年時代に特有なるローマンス愛好心に對して、舊約聖書の交渉如何。

(五)奉仕の動機を一層高むる爲めには、如何なる事項を青年の心意に接觸鼓吹すればよいか。

(六)舊約聖書に於けるメシヤ思想如何、其の思想の發達を辿つて研究した事があるか。

(七)舊約聖書の傳道的使命如何。

(八)歴史的物語と他の部分との比較研究とは如何、之を爲すに如何なる利益ありや。

第十章　舊約聖書と大人科

一　大人と日曜學校

抑も、日曜學校とは兒童の宗教々育所の謂に外ならずとの見解は、案外に永く且つ汎く保持せられて來た。從つて、搖籃から墳墓へと當然人の一生涯に終始すべき靈性の教育も、精々青年時代位までしか交渉を有せぬやうに兎角誤解せられ勝ちなのである。過去の日曜學校はいざ知らず、少くとも現在の日曜學校に於ては、是非共其の大人科を之が目標とし又頂點とせねばならぬ。禮拜とか祈禱會とかの時のみ宗教的になるので無く、將た又說教に依つて慰安せられ鼓舞せられ、其の間に靈の糧を味ひ得る以外に、如何しても組織的に次第を成して各自の心靈が養ひ育てられる必要がある。然るに、特に我が國民の性向として何時まで被教育者の地位に留まるを喜ばず、聖書の研究抔に於ても、稍もすれば斷片的又批判的に陷り易く、敢て一廉の愛執を以て之に沒入する程の氣魄に乏しいのは誠に遺憾至極である。既に大人である、素より其の日曜學校出席を强制すべきでは無い。忙しいとは言ふものゝ其の日常生活は實際危險が多いのであるから、聖書を初め基督教思想を根抵とした活教訓を肝銘せしめられる必要があらう。子供ならば種々の動機から日曜學校にも來て居るのであるが、既に成年者ともなれば、自から一定の確乎たる目的を有し、之が去就をも決するのであるから、其の教師たる者も充分大人の要求又は好尙をも知悉して、糾すべきは糾し、戒むべきは戒めるやうにせねばならぬ。

蓋し、大人は今方に、深刻なる人生問題に面接して居る。如何しても、之が光明と指導とを索めて來る筈である。兒童乃至青年にあつては、日曜學校も未だ其の靈性の豐熟準備の機關たるに過ぎ無かつたが、成年にあつては、其處に種々重大なる問題が伴つて來る。ましてや、紛雜混惑を極めた實生活に處して行く間、彼等の精神が眞理と正義と平和とに飢え渴いて居る事を思へば、適切なる施設と方針との下

に日曜學校の大人科を一層盛んならしむる必要があると思ふ。

二　聖書特に舊約聖書の引力

青年者に對しての教訓としても素より同樣ではあるが、大人科のバイブル・クラス（英語の組の意には非ず）に於ては、特に聖書の文學的魅力と驚異とが高調せらるべきである。現にイザヤ書の如きは、優に文學上の一傑作として講究せらるべき價値が充分に備はつて居る。言ふまでも無く大眼目は、同書の心靈的又メシヤ思想に存するのではあるが、夫れがまた稀有の美はしさを以て措辭形容せられて居るのである。即ち、暗に歩める諸の國の間にガリラヤが神の子の燿かしい光に照されるとか、國民の諸族皆一樣にアッスリヤに殪され果てたと見えた時に、一つの芽がエッサイの枝から芽ぐんだとか、さては不義の時代に際しイムマヌエルが正義の王者として現れたのは、然かも乾きたる土地に水の流れ漲り出で、單調極まる砂漠地に大なる岩山の影を備へたやうだとか、之等イムマヌエルに關はる不朽の文學には孰れも修辭上の美觀豊

かな結構が示されて居る。啻に之等のみに限らない、彼の第四十章に於ける牧羊者や山豚島嶼や「もろ〳〵の天」抔の形容に至つては、世界のあらゆる文學に引き較べて見て、其の美はしさ眞に總てを壓するの概を有するのである。

イザヤに就て言はれた事は總て他の豫言書全體にも當て箝まるのであつて、其の珠玉の文學は前數章述べ來つた所からも略ぼ察知する事が出來やう。其他、ルッ記は感情漲れる文學であつて、讀者の眼前にはユダヤ田園生活の絶妙優美の情景が展開せられて來る。若し夫れ、サムソンの機智、デボラの母性的愛國心、天性の粗野には不釣合のギデオンの愛嬌、エフタの剛健なる信仰等に至つては、感興共に著しきものがある。開かれ得べき舊約の寶庫には、以上の外に猶詩篇がある。蓋し詩篇は國民の歌集とも言ひ得べく、啻にイスラエルの道德方面又心靈方面の歴史に斜光を投じて居るのみならず、搗てゝ着想と表現との美はしさ類ひも稀れに、人の要請進むと共に夫れ相應の形式に展開せられて居る事さへ認め得るのである。

三　日常生活上の諸問題

青年時代の熱誠と其の信仰の浮泛力とが、兎も角も費されて仕舞ふと、其の後には當然成年者の嚴肅なる意識が稍ともすれば厭世主義や不可知論に陷り易いのである。屢々不可解と速斷せられ勝ちな諸種の問題が彼等の精神を壓迫して、端無くも新しい危機に際會面接する事ともなる。故に大人科の教師たる者は、此の嵐に惱む者をして嵐に抵抗せしむべく指導せねばならぬ。斯る折に起り來るべき問題の二三を擧ぐれば、宇宙や人生の起源如何、機會とは何ぞ、運命何物ぞ、將た又生の絡れ終に如何に說かるべきか抔であらう。然かも、聖書は之等に對し、其の開闢談及び撰理訓に於て一廉の解答を與へて居る。卽ち、神は此の天地を創造せられたのであつて、森羅萬象は皆神を愛する者のために働きて益をなすのである。

罪はまた、他の神秘である。卽ち、罪の起源や性質の問題を始めとして、此の罪から救はるゝ道如何との難關さへもある。所が、創世記卷頭の數章には、之が起因と共に其の急速なる發達に就て最も堅實なる解說を下して居るのである。由來、聖書は自から其の間に幾多顯著なる罪の特質を展開して居るのみか、之に對する警告如何にも數多く、斯くて遂に之から赦され又癒さるべき最良の道を提供して居る。蓋し、我等に現實なる問題は唯如何にして罪から救はるべきかであつて、聖書は實に有効に此の問題を取扱つて居る。要するにイスラエルの全歷史は罪に關する一篇の說敎と云ふ事が出來やう。

次には、悲哀を始めとして幾多の試練の問題があるが、其の多くは皆聖書に於て然るべき解決の道が示されて居る。卽ち、彼のヨブ記は此の問題の解決に努力して居るので、第卅九・七十三及び卅七篇抔多くの詩篇も亦此の問題を中心として居るのである。蓋し、舊約聖書を貫通して居つて動かすべからざるは、正義は成功よりも偉大であるといふ觀念なのであつた。唯善惡の應報とのみは看過せられ無い人生苦樂の不平等も、第四十九・卅七兩篇の詩篇に於て、箴言に於て、又總ての豫言書

に於て、賢明確實なる結論に到達するのである。曰く『多くの財寶ありて夫れに惱まされんよりは、寧ろ所有少くしてエホバを畏れて過すは優れり』と。

猶右の外舊約に於ては、死の意義とか、靈性不朽の疑問とか、幾多個人的の問題が考察されて居る。

四　穩健なる哲學書

舊約聖書を繙いて居ると、我等は端無くも頗る興味のある且つ如何にも實際的な心理學を其の間に見出し得るのである。即ち肉體上の諸機關はそれ〴〵に種々なる道德官能若しくは精神官能の中樞と思惟せられたのであつて、憐れみは腸に、意志は腎臟に、力は腰に、總ての思慮や道德性は心臟に存するとせられて居る。所詮、彼のギリシャ人抔と同樣で、頭腦を以て我等の存在の中心とは思はず、之に當るべき名譽は常に心臟の占有する所であつた。

抑も、舊約聖書に於ける哲學的又敎義的の中樞原理は、神の存在なのであつた。而して、これこそは即ち、總ての道德的及び理知的省察の出發點なのであつた。神は實在し給ふ、彼は敢て立證せられる必要を有して居らぬ。由來、如何樣の哲學に於ても、何等か其の基本的前提が無ければならぬのであるが、夫れには、舊約聖書の前提たる此の「神」よりも穩健なるものは存し得ぬのである。

罪惡に關する舊約の敎理は、單純にして然かも深玄を極めて居る。即ち、創世記の第三四兩章に於て罪の起源と其の急速なる發達とが窺はれるので、之に徵すれば、罪の起りは神を疑ふ不信仰なのであつた。所が、其の第六章に至り夙くも罪は人類一般に擴まり、最早大洪水に依つて此の地上より一掃するの外無き程に及んだ。豫言者の或る者に至つては、屢々罪惡をば其の神觀と正反對に思惟したのであつて、現に、神をば愛の本體として敎へたホゼアの如きは、神愛に不滿を懷きて之を拒絕するのが即ち罪であると斷じて居るのである。

舊約の自然觀に至つては、甚だ驚嘆すべきものがある。即ち、自然其のものに於

て神が直接現在する事が肯定せられて居つた。神は太陽をして登天せしめ、其の時折に雨を降り注ぐのみか、風は神御自身の使者であり、甚だしきは、宛かも牧者が其の群を導き出すが如く、神自ら天の星を導き出でゝ一々其の名をさへ喚ぶといふのである。然ればこそ、舊約聖書の奇蹟は決して超自然では無い、實に其の臨在を以て自然を充せる神の當然自然の表現たるに過ぎぬと解釋せらるべきである。

靈性不朽の敎理も亦、驚くべき明確さと力强さとを以て示されて居る。素と〳〵神との間に朋友又は伴侶の關係の存する以上、死と雖も到底神の友をば滅落の儘に看過し置くべきでは無い（詩十六篇）。ヨブ記に於て又詩篇第七十三篇に於て、現世の不平等及び正邪混淆に徵し來つて、靈性の不朽が確かに信仰に依つて把握せられて居る。之等不當の狀態も死後に皆修整せらるべきである。蓋し、聖書の哲學は道德的である。而して、正義こそは實に終始反覆せられた主題の一つなので、「惡より離るゝ」事が自から其の脚註にも當るのであつた。

五　舊約聖書の社會的敎訓

舊約聖書の兩部分即ち其の律法と豫言とは、社會問題及び其の我等の實生活に對する交渉如何の研究上特殊の價値を有して居る。モーセ法の條項は何れも皆人道的であつて、人と人との關係をば常に兄弟の關係に見立てるのであつた。然ればこそ、既に夙くも謂ゆる「契約の書」（出二十一―二十三章）に於て、弱き者や奴隷又は旅人の安全が保證せられた程なのである。

蓋し、申命記は實に理想的の社會法典である。即ち、總ての社會關係が依つて以て立せらるべき原則は、父として聖き神を信じ、我等人類が互に同胞として愛し合ふべき事なのであつた。故に、貧しき者は施與を承け、敵や異邦人の權利さへも、安全に肯認せられたのである。

若し夫れ、豫言者の使命に至つても自から社會的の敎訓に充たされて居る。賄賂を貪る裁判官や壓迫を事とする王侯は、不忠實なる牧者として彈劾された。蓋し、

神に於ける信仰は、同胞に對して忠實なる奉仕を果すのが當面の原則又責務なのである。就中、イザヤ・ホゼア・アモス及びミカの如きは、彼等が召命を受けた一大使命として正直と正義公平とを雄辯に力説して居る。而して壓政は竊盜と共に神に逆らふ大罪視された。神の子供達は概して皆貧しく且つ弱いからである。畢竟、人類は一大家族である。故に、口論爭鬪は自から家内喧嘩にも比すべき罪惡なのであつた。

六　メシヤ思想

我等に對し舊約の美觀を展開して明確ならしめる光明は、神の子の光輝ある出現に外ならぬ。此の事は確實であつて、決して誤解せらるべくも無い。舊約の諸卷を通讀して行くと、其處にはメシヤ降格の希望が、王笏として、星又は太陽として、豫言者・祭司又王者として、而して最後に人を贖ふべきエホバの僕として示されて居る。勿論、敎師達は比較的に舊い舊約の書冊中に於ても、之に關聯せる概括的で然かも多少不明瞭なる引照をば其處此處に見出し得るのであるが、降つて王國時代又は王者達自身の特性及び職能に於て我等は一層明確なるメシヤ觀念を提示せられるのである。現に詩篇の中には、メシヤに據れる解放を描いて力强い信仰を鼓吹したのがある。其の第一篇及び第七十二篇の如きは、之が適例である。

イザヤ書も亦屢々、受膏者の豫言的記錄として新約の方に引用されて居る。其のイムマヌエルやエホバの僕抔の個所は、如何にも巨細に攻究せられて其の相互の關係さへ對比せられ、延いては、其の間に於ける人格的メシヤ觀念が如何に發達したか、跡方までも辿られるのである。若し夫れ、進んでゼカリヤやマラキの如き豫言書の末章に至つては全然人格的の豫言に充されるのであつて、現にマコ抔は此のマラキが殘した豫言に其の福音書の筆を起して居る程である。

舊約聖書の中、此の方面の敎訓は各科の孰れにも適用せられるのではあるが、舊約のメシヤ思想に關聯して引用せられて居る此の思想發展の跡方を研究する事は、

當然大人科に至つて始めて其の好機會が與へられるのであつた。殊に之等新約の引照は何れも皆舊約の原文と彼れ此れ比較研究せらるべきであつて、斯くして始めて彼のピリポが如何に適切に「福音の始め」(賽五十三章)を說いてイエスを紹介し得たか、また彼のパウロが如何にキリストの受難や復活に就て述ぶる時に、始終舊約よりして論證するを常としたこと抔が明白になつて來るであらう。

大人科が、舊約聖書よりして學び得べき方法は幾らもある。即ち、書に依つて書を解するのも一方法であるが、其他、豫言者の使命を巨細に研究する事も出來、其の間から重要なる敎理を摘出講究する事抔も出來るのである。

總括と助言

(一)大人科に於て、舊約聖書を大文學として取扱ふべき方法。

(二)人生觀が一層眞面目になり、其の日常生活上にも幾多の問題の起り來る此際、舊約聖書は實に彼等に必要なる友であつて、書中の人物亦男女の別無く皆斯種の問題に遭遇して居る。

(三)敎義も哲學も共に、興味もあれば信賴の價値もある。神と罪とに關する聖書の哲學的敎訓如何。

(四)豫言は格別であるが律法にしても、今日の團體生活上又は個人生活上の必要に應じて、それ〴〵に社會的使命を有して居る。

(五)舊約聖書の中心は、メシヤ問題である。舊約卷頭の人間生活に現れた曙光よりして後代の人格的豫言に至るまで、此の思想發展の事蹟を辿れ。また各時代の民族的希望が、如何樣に描き出されて居るかを示せ。

舊約聖書總論（完）

大正十一年一月二十日印刷
大正十一年一月廿二日發行

定價金五拾錢

譯者　赤星仙太
東京市神田區美土代町三ノ三
日本日曜學校協會代表者
發行者　今村正一
東京市芝區新櫻田町十九番地
印刷者　岡千代彦
東京府芝區新櫻田町十九番地
印刷所　自由活版所

發行所　東京市神田區美土代町三ノ三　日本日曜學校協會本部
振替東京一八〇〇四番
發賣所　警醒社、敎文館、福音書店、日曜世界社
日信房、書類會社

不許復製

325
394

日曜學校叢書

◆第一篇　兒童心理　柳原貞次郎著　定價廿五錢　稅二錢

◆第二篇　日曜學校諸問題　海老澤亮著　同　拾五錢　同二錢

◆第三篇　教育的心理學　柳原貞次郎著　同　五拾錢　同四錢

◆月刊「日曜學校」　郵稅共一ヶ年壹圓五拾錢

發行所　東京市神田區美土代町青年會館內
日本日曜學校協會本部
電話神田二三二一番
振替東京一八〇〇四番

終